

# 2024～2025年シーズンの 鳥インフルエンザのサーベイランス の結果・発生状況

2026年3月

環境省自然環境局野生生物課鳥獣保護管理室

# 2024～2025年シーズンの高病原性鳥インフルエンザ (HPAI) 発生状況 (概要)

○発生件数 (2024年9月～2025年6月)

- ・野鳥：1道18県、227事例 (うち環境試料19事例)
- ・哺乳類：1道、5事例
- ・家きん：1道13県、51事例
- ・飼養鳥：0例

○ウイルスの亜型 (事例数)

- ・H5N1亜型 (野鳥 207、哺乳類 5)
- ・H5N2亜型 (野鳥 1)
- ・H5亜型 (野鳥 19)

○初発：9月30日回収のハヤブサ (北海道乙部町)

○最終確認：6月17日回収のオジロワシ (北海道釧路市)

○多発種：ハシブトガラス (5道県、56事例)

○希少種の発生状況 (事例数)

- ・国内希少野生動植物種：オジロワシ (1)、オオワシ (2)、ハヤブサ (6)、タンチョウ (2)、ウミガラス (4)
  - ・絶滅危惧種<sup>\*1</sup>：マナヅル (5)、ナベヅル (35)、ケイマフリ (2)、ウミスズメ (3)、ラッコ (4)
- 初確認種：アカエリカイツブリ、ハシブトウミガラス、ウミガラス、ケイマフリ、ウミスズメ、エトロフウミスズメ、ウトウ、オオハム、アビ類、ゼニガタアザラシ、ラッコ

○哺乳類の発生状況：ラッコ (4)、ゼニガタアザラシ (1)

\*1 絶滅危惧IA類、IB類、II類のうち、国内希少野生動植物種をのぞく

# 2024～2025年シーズンのウイルス保有状況調査

- 都道府県等の協力の下、環境省が実施した死亡野鳥等のウイルス保有状況調査において、高病原性鳥インフルエンザウイルス（HPAIV）を147事例で確認した。
- その他大学等の独自調査により、HPAIVを83事例（野鳥糞便3事例、環境水15事例、死亡野鳥等60事例、哺乳類5事例）で確認した。
- 合計で、野鳥（環境試料含む）では227事例、哺乳類では5事例でHPAIVを確認した。

ウイルス保有状況調査総括表(過去6年間)

調査年 (月)		2019-2020 (10-9月)	2020-2021 (10-9月)	2021-2022 (10-8月)	2022-2023 (9-5月)	2023-2024 (9-6月)	2024-2025 (9-6月)
定期糞便採取調査	検査総数 <sup>*1</sup>	6,072	10,985	8,801	5,817		
	HPAIV	0	2	0	1	実施なし	実施なし
	LPAIV <sup>*7</sup> (分離株数)	13 (14)	27(28)	41(41)	12(11)		
発生時追加糞便	検査総数	0	600	260	0		
	HPAIV	0	0	0	0	実施なし	実施なし
	LPAIV (分離株数)	0	0	4(4)	0		
環境試料 (水)	検査総数	14	13	5	7		
	HPAIV	0	1	0	0	実施なし	実施なし
	LPAIV	0	0	0	0		
死亡野鳥等調査	検査総数 <sup>*1</sup>	333	1,322	946	1,182	898	982 <sup>*6</sup>
	HPAIV	0	31	97	150 <sup>*2</sup>	103	147
	LPAIV	0	1	2	2	1	1
	環境試料 <sup>*3</sup>		24	8	11	14	18
大学や都道府県による独自調査	HPAI		死亡野鳥	1	90	39	61
			飼養鳥			2	0
			哺乳類				5
その他(死亡野鳥、環境試料) <sup>*4</sup>	HPAI			1	3 <sup>*5</sup>		1
HPAIV陽性総数		0	58	107	252	158	232

※1 国立環境研究所で検査を実施した糞便個数・死亡野鳥等件数。死亡野鳥等については、一部自治体では、別途、検査を実施している。

※2 飼養鳥10事例を含む ※3 野鳥糞便、環境水、八工を含む ※4 農林水産省疫学調査チームによる回収個体 ※5 大学や都道府県による独自調査と重複

※6 一部飼養鳥を含む。回収日2025年6月30日までのデータ（国立環境研究所） ※7 LPAIV;高病原性以外の鳥インフルエンザウイルス

# 2024～2025年シーズンの検査実施状況

## 死亡・衰弱野鳥（国立環境研究所・大学等調査合算）

- 2024年9月～2025年6月までに、計1,261件の死亡野鳥等の検査を実施した。
- 検査数が最も多かったのは11月（218件）、次いで3月（184件）であった。
- 他方、検査したうち陽性となった検体の割合が最も高かったのは3月（41.3%）であった。

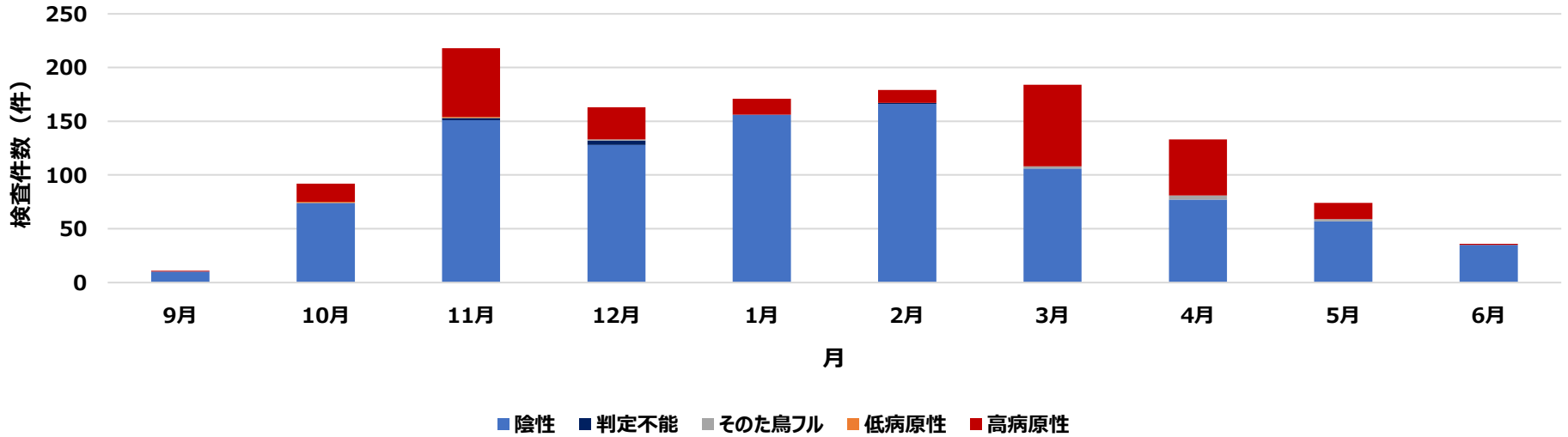
### 都道府県別死亡野鳥サンプル受入状況（受入日でカウント）

都道府県	2024年				2025年					
	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月
北海道	5	36	30	44	34	42	92	92	49	14
青森県	0	1	1	0	4	0	0	0	0	0
岩手県	0	2	8	10	10	7	25	4	2	0
宮城県	1	0	2	4	2	2	0	0	0	0
秋田県	0	3	2	0	3	1	2	1	0	0
山形県	0	1	0	0	3	0	0	0	0	0
福島県	0	4	13	4	16	7	13	0	0	5
茨城県	3	1	3	9	14	5	2	0	0	5
栃木県	0	0	0	9	2	11	1	0	0	0
群馬県	1	0	0	1	5	5	11	1	0	1
埼玉県	0	0	2	0	4	2	1	0	0	0
千葉県	0	0	1	0	2	1	1	0	0	0
東京都	0	0	3	7	1	0	0	1	0	0
神奈川県	0	3	6	1	1	3	0	2	0	0
新潟県	0	4	6	5	0	3	3	1	3	4
富山県	0	0	1	0	5	0	0	0	0	5
石川県	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0
福井県	0	0	8	0	0	0	0	1	0	0
山梨県	0	0	1	0	0	0	0	0	2	0
長野県	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
岐阜県	0	0	5	0	0	0	0	0	0	0
静岡県	0	0	1	1	3	2	0	0	0	0
愛知県	0	0	1	3	2	1	0	1	0	0
三重県	0	2	1	0	1	3	0	0	0	0

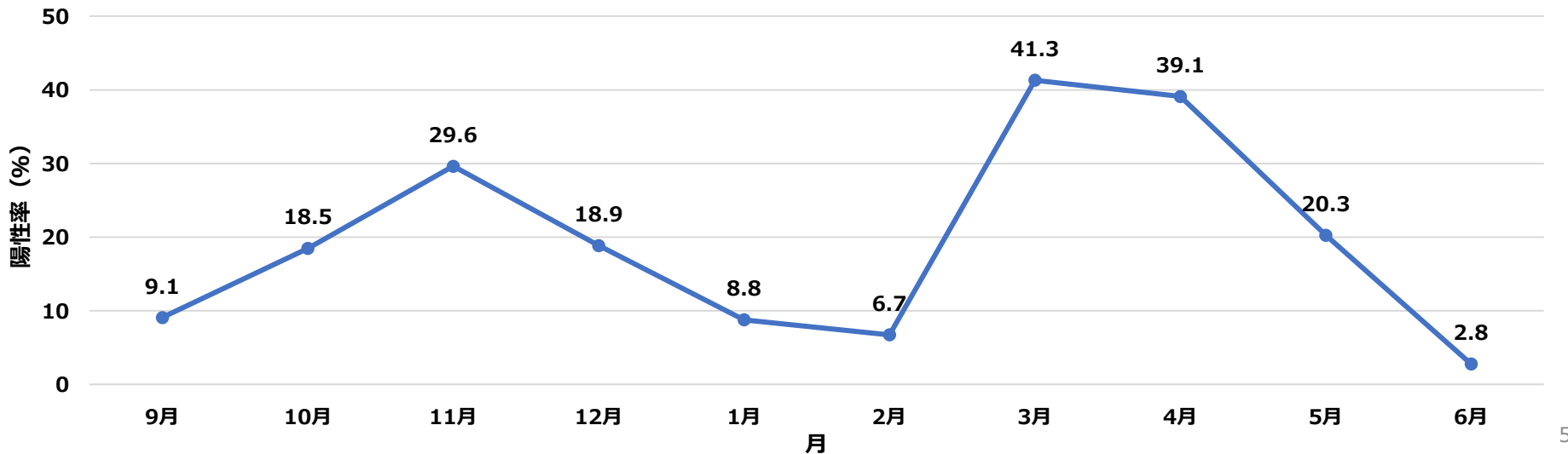
都道府県	2024年				2025年					
	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月
滋賀県	0	1	4	1	0	1	0	2	0	0
京都府	0	2	1	1	2	0	0	5	0	0
大阪府	0	0	1	1	3	25	0	0	0	0
兵庫県	0	1	3	2	1	0	1	0	5	0
奈良県	0	2	1	1	3	0	1	0	0	0
和歌山県	0	1	0	4	5	0	0	0	12	0
鳥取県	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
島根県	0	0	3	0	2	0	0	0	0	0
岡山県	0	0	7	1	1	0	2	10	0	0
広島県	0	23	11	1	4	1	2	0	0	0
山口県	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0
徳島県	1	2	9	2	2	5	2	4	0	2
香川県	0	1	4	7	0	9	5	1	0	0
愛媛県	0	0	1	2	0	18	0	0	0	0
高知県	0	0	2	4	5	1	1	1	0	0
福岡県	0	0	4	2	3	0	0	0	0	0
佐賀県	0	0	5	1	0	1	3	0	0	0
長崎県	0	0	6	0	1	0	0	0	0	0
熊本県	0	0	2	2	4	5	0	0	0	0
大分県	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0
宮崎県	0	0	9	3	5	1	8	0	0	0
鹿児島県	0	1	50	28	15	16	8	5	1	0
沖縄県	0	1	0	2	0	1	0	0	0	0

# 2024～2025年シーズンの検査実施状況 死亡・衰弱野鳥

## 月別検査件数



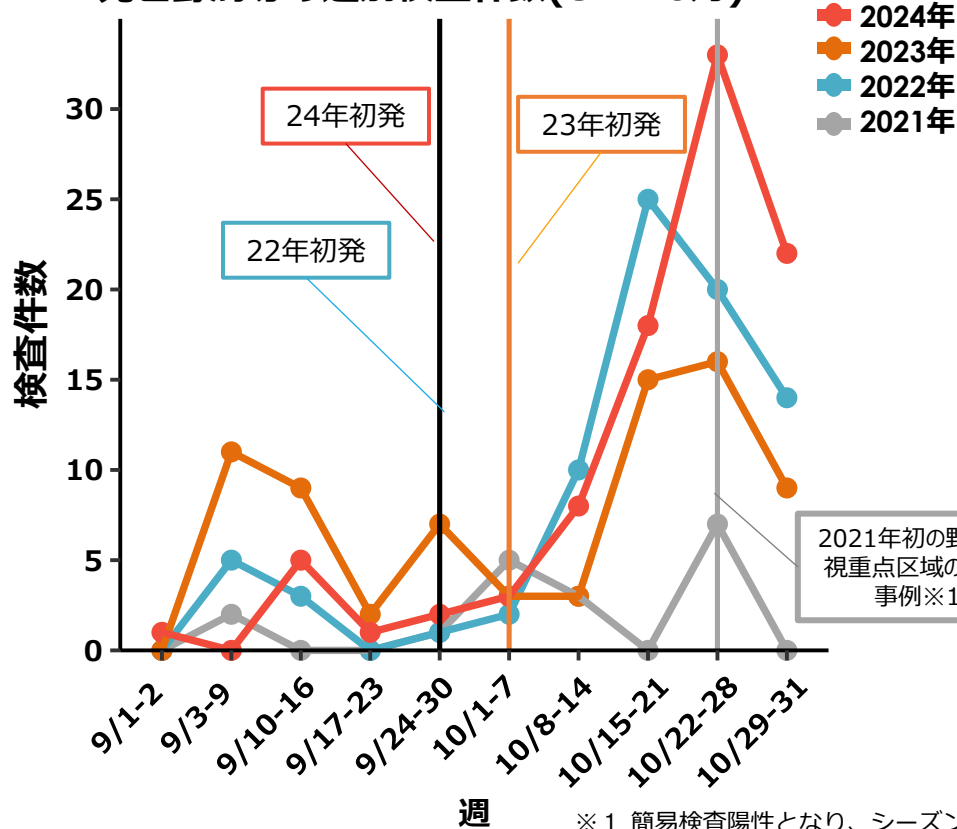
## 高病原性鳥インフルエンザ 陽性率



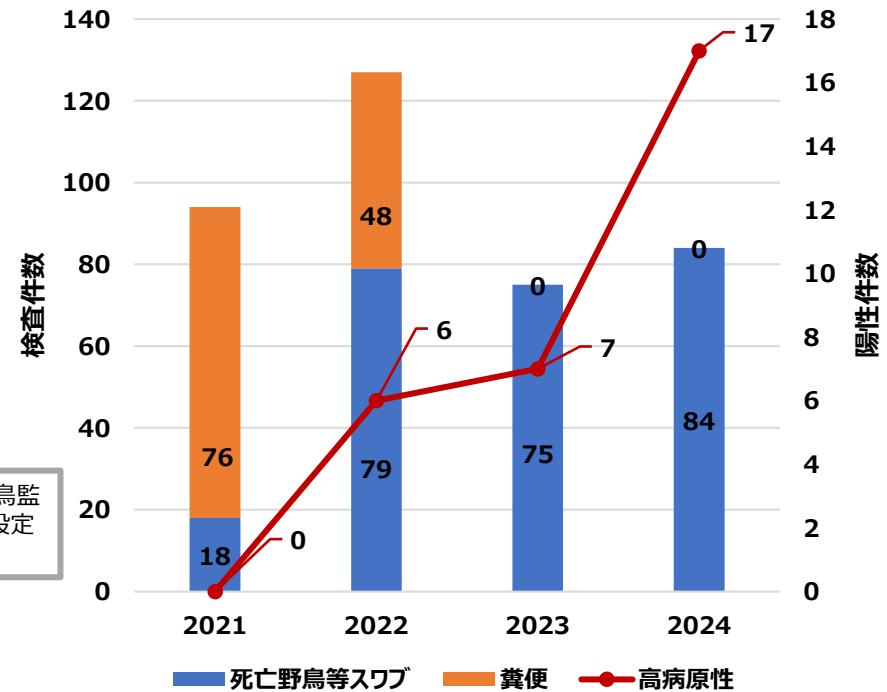
# 過去4シーズン（9～10月）の検査実施状況 @国立環境研究所（死亡・衰弱野鳥）

- 早期警戒期間を設定していない2022～2023年シーズンは、シーズン初発事例以降に検査件数が増加。
  - 早期警戒期間を開始した2023～2024年シーズンは、前シーズンと比べて初発の前に実施された検査件数が多いが、2年目となった2024～2025年シーズンは2023年以前と顕著な差はなかった。
  - 9～10月中の検査実施数自体はシーズン間に大きな違いはない。
- ⇒ 2024～2025年シーズンは初発事例の確認は早かったものの、他の年より調査努力量が多かったわけでは無い。

### 死亡野鳥等の週別検査件数（9～10月）



### 年別検査件数・陽性件数（9～10月）



※1 簡易検査陽性となり、シーズンで初めて野鳥監視重点区域が設定された事例（その後の検査で低病原性と判明）  
 ※2 2023年より定期糞便調査を廃止した一方で、早期警戒期間を設定し9～10月の死亡野鳥等調査を強化した。  
 ※3 2024年の検査件数には飼養鳥を含む。

# 2024～2025年シーズンのHPAI発生状況

## 野鳥・環境試料・哺乳類・家きん

2024年9月から2025年6月までの発生状況（全国）

○ 野鳥・環境試料：1道18県、227事例

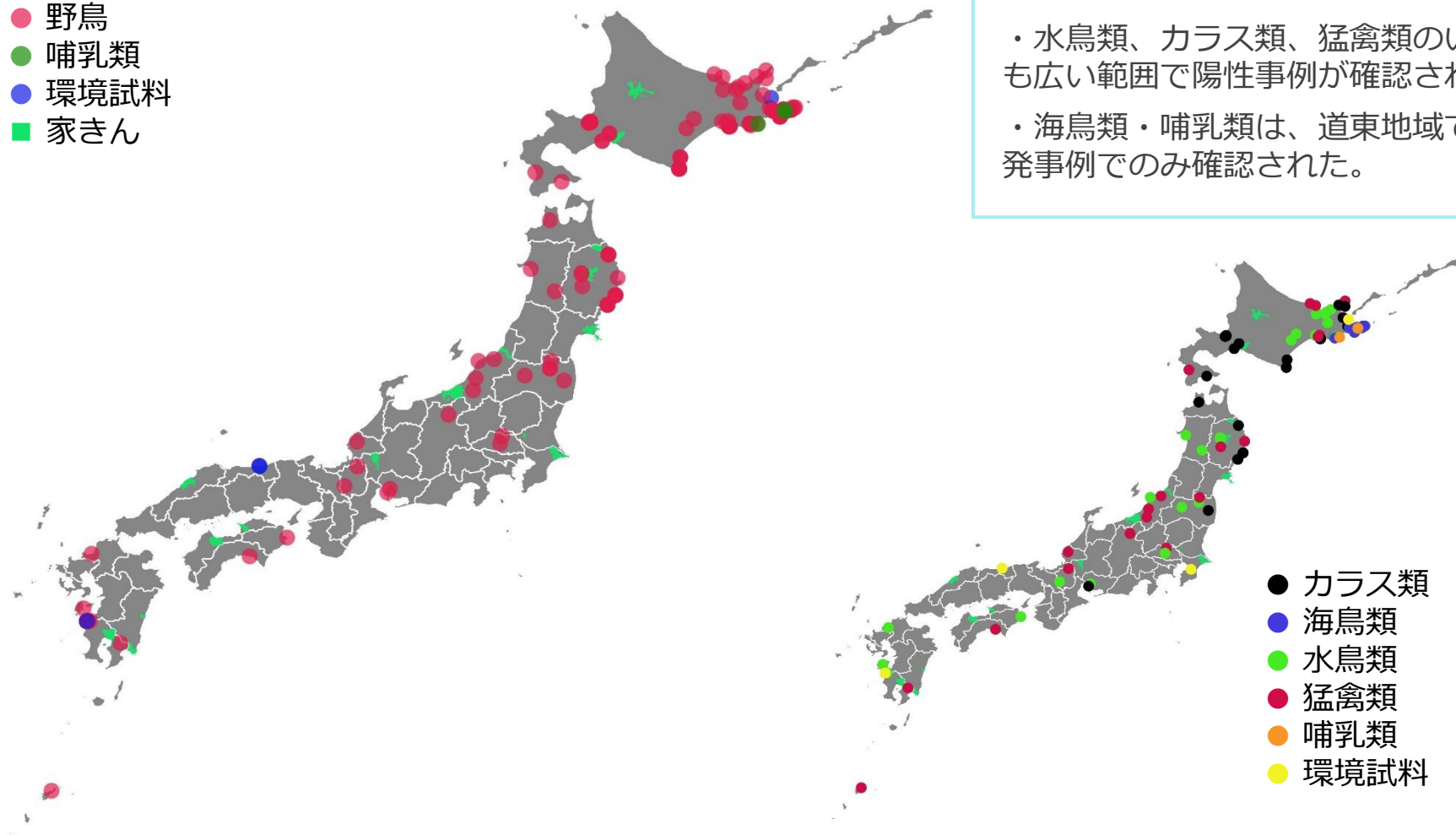
○ 哺乳類：1道、5事例

○ 家きん：1道13県、51事例

- 野鳥
- 哺乳類
- 環境試料
- 家きん

・水鳥類、カラス類、猛禽類のいずれも広い範囲で陽性事例が確認された。

・海鳥類・哺乳類は、道東地域での続発事例でのみ確認された。

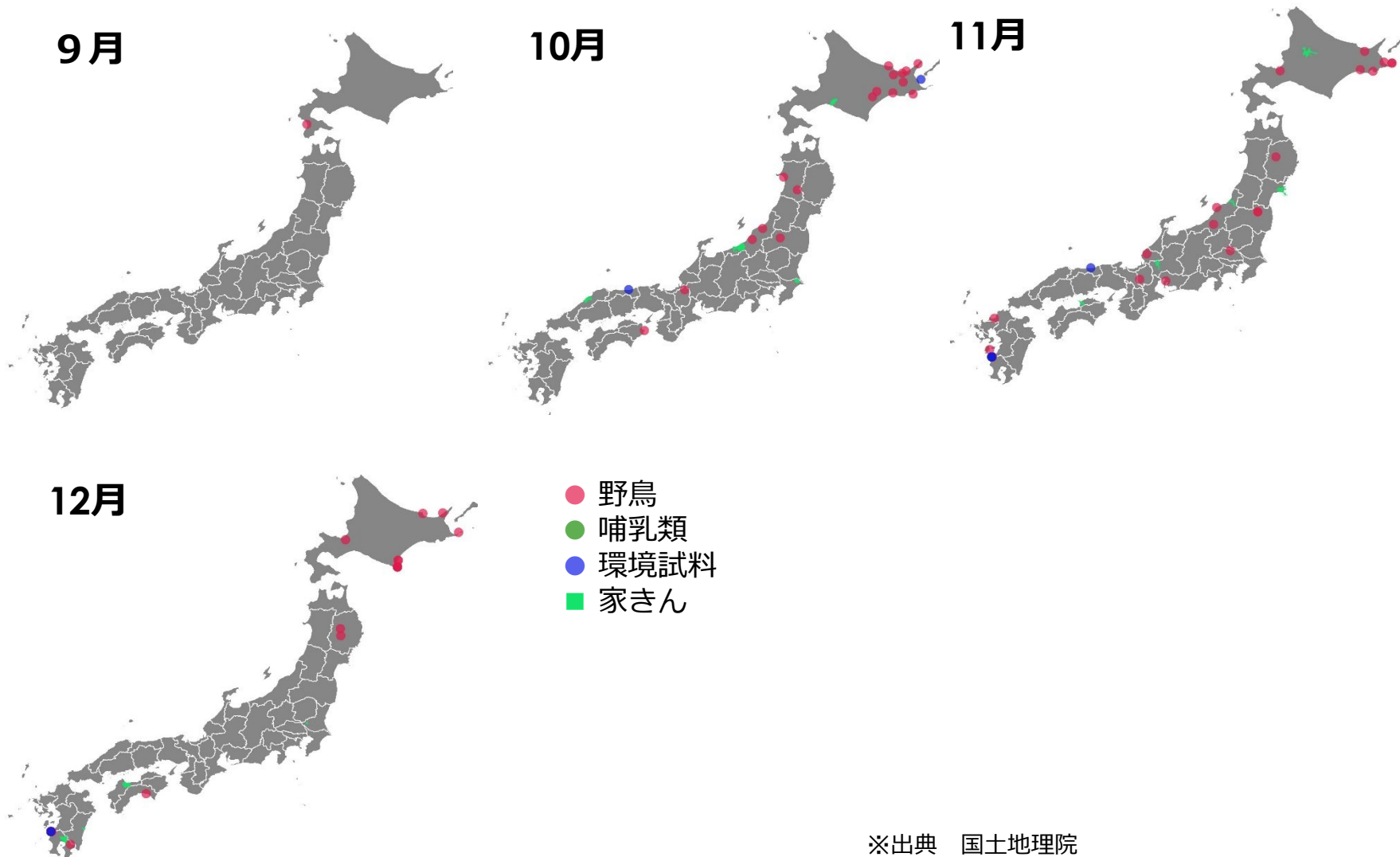


- カラス類
- 海鳥類
- 水鳥類
- 猛禽類
- 哺乳類
- 環境試料

# 2024～2025年シーズンのHPAI発生状況

2024年9月～12月までの発生状況

シーズン初のHPAI陽性事例は、9月30日に北海道乙部町で回収されたハヤブサ



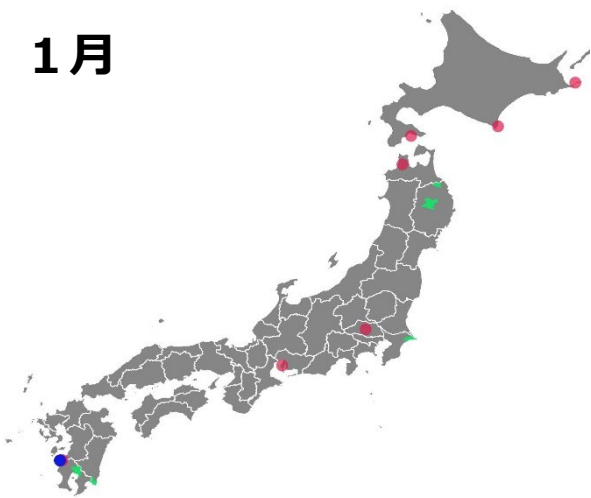
※出典 国土地理院

# 2024～2025年シーズンのHPAI発生状況

2025年1月～6月までの発生状況

シーズン最後のHPAI陽性事例は、6月17日に北海道釧路市で回収されたオジロワシ

1月



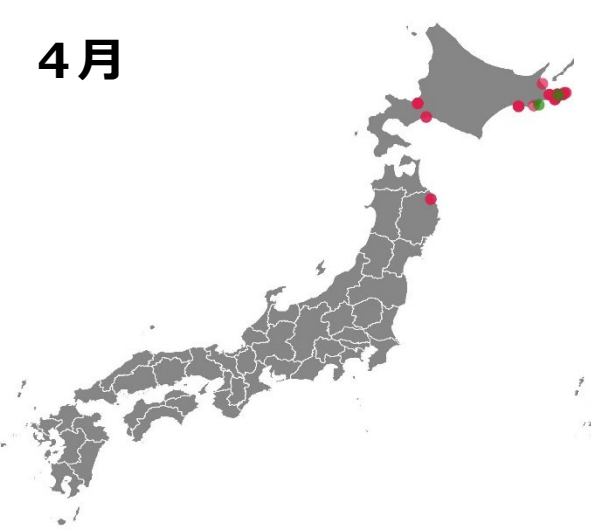
2月



3月



4月



5月



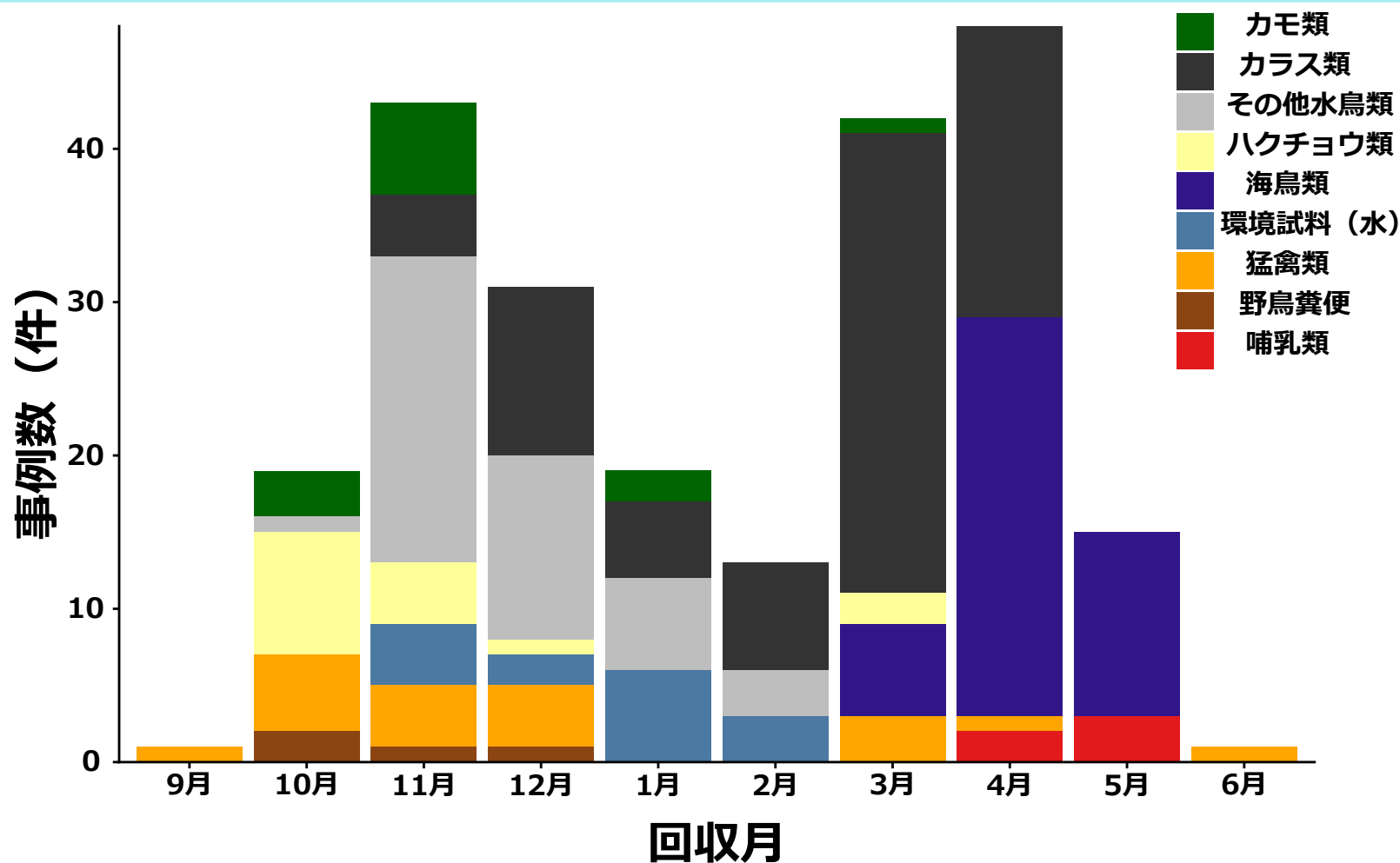
6月



● 野鳥 ● 哺乳類 ● 環境試料 ■ 家きん

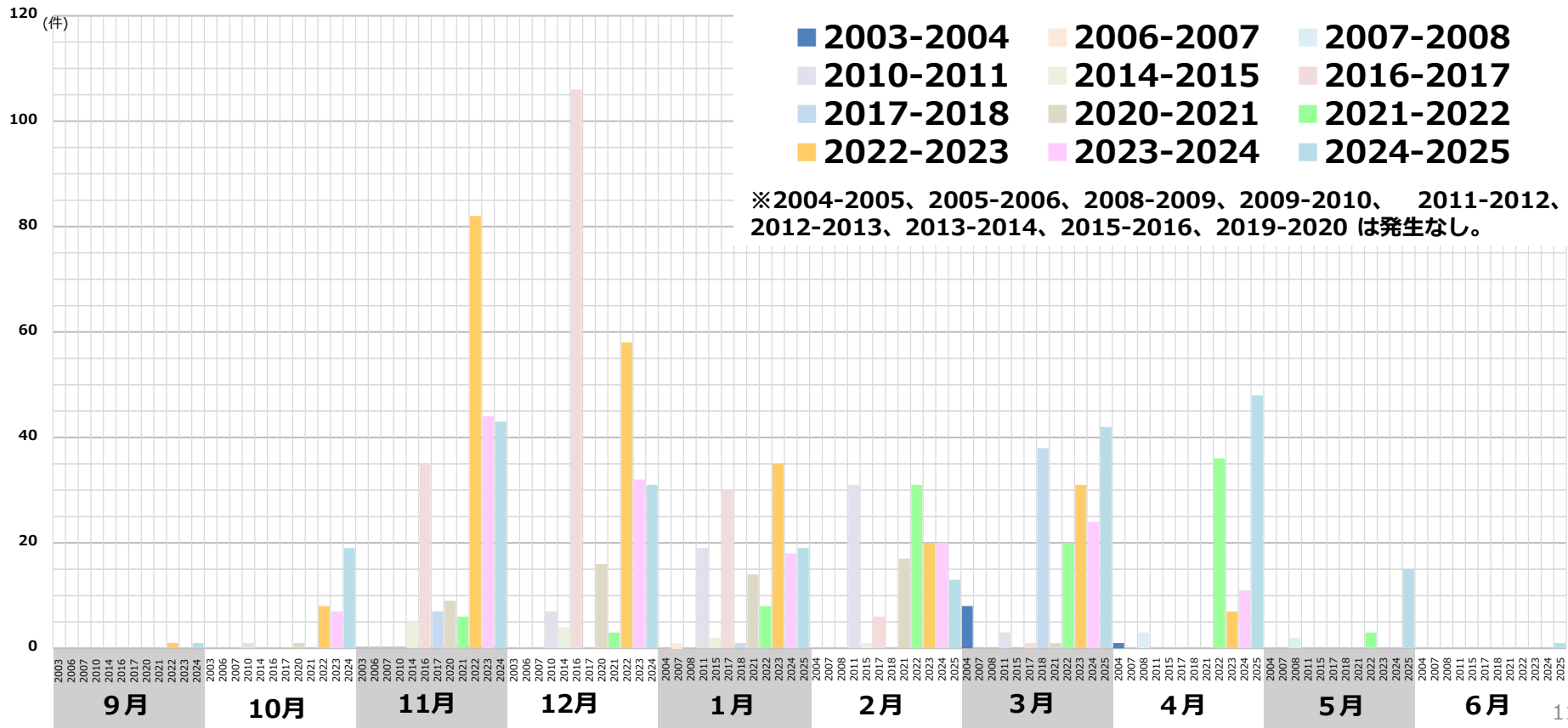
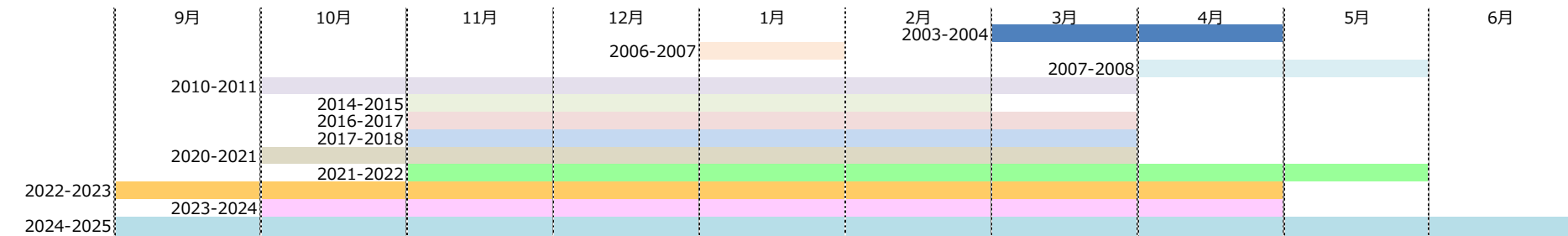
# 2024～2025年シーズンのHPAI発生状況 (死亡野鳥等・野鳥糞便・環境試料/月別の事例数)

- 前シーズンと同様に秋（11月、43事例）と春（4月、48事例）に2つのピークがあった。
- 主に水鳥類が秋のピーク（30/43事例）を、カラス類と海鳥類が春のピーク（45/48事例）を構成。



# 2024～2025年シーズンのHPAI発生状況 (月別の事例数/過去シーズンとの比較)

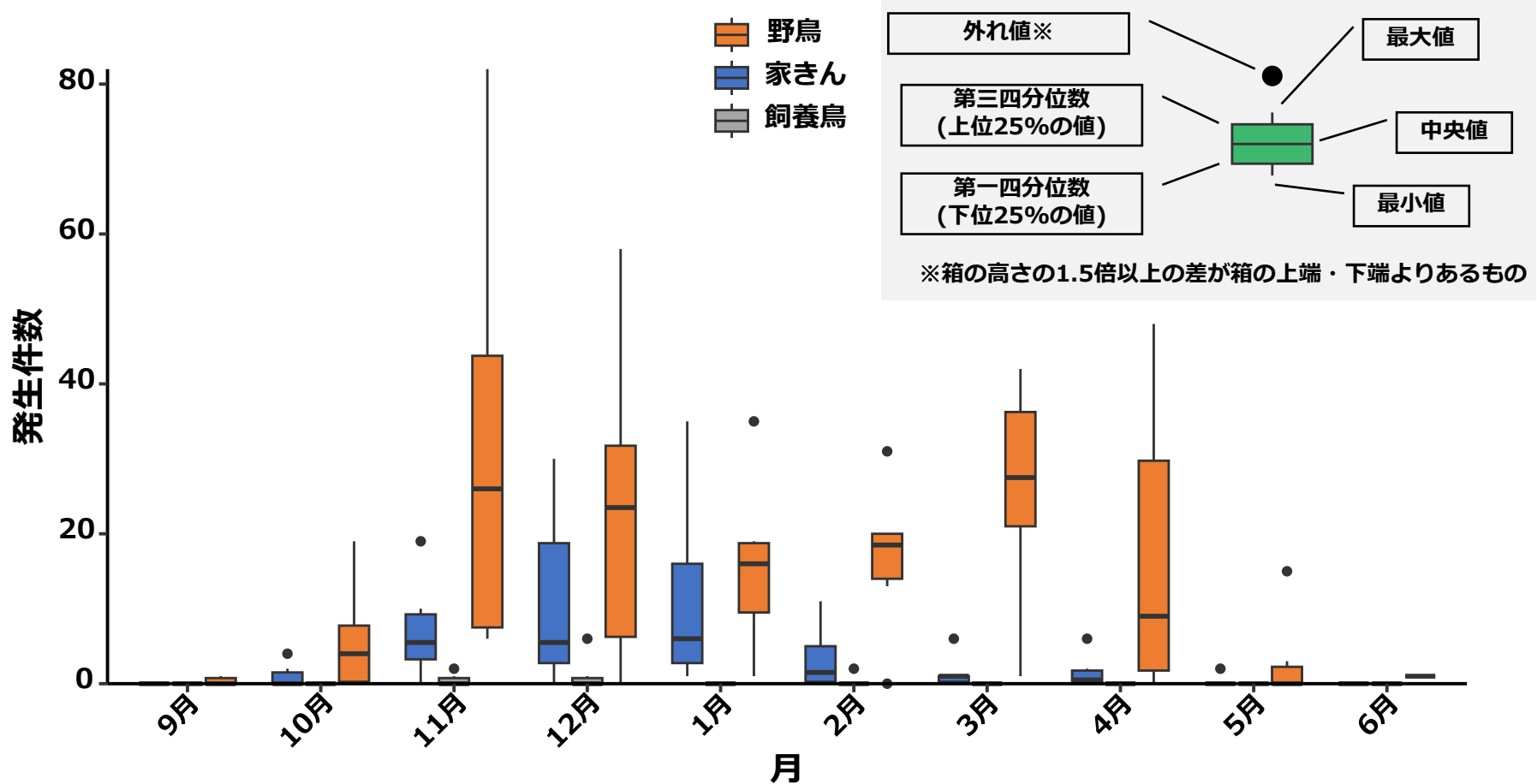
## 高病原性鳥インフルエンザウイルス陽性事例数の月別推移 (野鳥における発生状況)



# 2024～2025年シーズンのHPAI発生状況 (月別の事例数/直近6シーズンの傾向)

・HPAI発生があった直近6シーズンの発生件数は、野鳥は秋から冬と春の2つのピークが存在し、家きんでは冬にピークが存在。

## 直近6シーズンの月別発生件数



# 2024～2025年シーズンのHPAI発生状況 (種別の検査件数・陽性件数)

国立環境研究所、北海道大学、鹿児島大学、愛媛県、猛禽類医学研究所の検体（死亡野鳥・衰弱野鳥・哺乳類）

## 水鳥類

種名	高病原性	低病原性	その他鳥フル	判定不能	陰性
シジュウカラガン	0	0	0	0	1
マガン	0	0	0	0	2
コブハクチョウ	0	0	0	0	9
コハクチョウ	0	0	0	0	20
オオハクチョウ	15	0	0	0	85
ハクチョウ類	0	0	0	0	5
オシドリ	1	0	0	0	13
トモエガモ	0	0	0	0	4
ハシビロガモ	0	0	0	0	1
オカヨシガモ	0	0	0	0	3
ヨシガモ	0	0	1	0	0
ヒドリガモ	8	0	0	0	26
カルガモ	0	2	0	0	17
マガモ	1	0	0	0	90
オナガガモ	0	0	0	0	27
コガモ	2	0	0	0	7
ホシハジロ	0	0	0	0	25
キンクロハジロ	1	0	0	0	7
コオリガモ	0	0	0	0	1
オオバン	0	0	0	0	3
マナヅル	5	0	0	0	5
タンチョウ	2	0	0	0	43
ナベヅル	59	0	0	4	35
コウノトリ	0	0	0	0	4
トキ	0	0	0	0	4
ダイサギ	0	0	0	0	5

## 海鳥類

種名	高病原性	低病原性	その他鳥フル	判定不能	陰性
スズガモ	0	0	0	0	7
ビロードキンクロ	0	0	1	0	0
クロガモ	0	0	0	0	1
ウミアイサ	0	0	0	0	2
カイツブリ	0	0	0	0	2
アカエリカイツブリ	2	0	0	0	1
カンムリカイツブリ	0	0	0	0	45
アカエリヒレアシシギ	0	0	0	0	3
ユリカモメ	0	0	0	0	3
ウミネコ	11	0	0	0	2
シロカモメ	0	0	0	0	1
オオセグロカモメ	5	0	2	0	3
アビ類	3	0	0	0	1
セグロアジサシ	0	0	0	0	4
ハシブトウミガラス	1	0	0	0	0
ウミガラス	4	0	2	0	0
ケイマフリ	2	0	0	0	0
ウミスズメ	3	0	0	0	0
エトロフウミスズメ	6	0	2	0	0
ウトウ	6	0	1	0	3
オオハム	2	0	0	0	1
シロエリオオハム	0	0	0	0	1
フルマカモメ	0	0	0	0	1
オオミズナギドリ	0	0	0	0	5
ハシボソミズナギドリ	0	0	0	0	10
ヒメウ	0	0	0	0	8
ウミウ	0	0	0	0	7
カワウ	0	0	0	0	1

# 2024～2025年シーズンのHPAI発生状況 (種別の検査件数・陽性件数)

国立環境研究所、北海道大学、鹿児島大学、愛媛県、猛禽類医学研究所の検体（死亡野鳥・衰弱野鳥・哺乳類）

## 猛禽類

種名	高病原性	低病原性	その他鳥フル	判定不能	陰性
クマタカ	0	0	0	0	4
ハイタカ	0	0	0	0	1
オオタカ	4	0	0	0	9
トビ	1	0	0	1	5
オオワシ	1	0	0	1	43
オジロワシ	3	0	0	0	39
ノスリ	3	0	0	0	14
アオバズク	0	0	0	0	1
コミミズク	0	0	0	0	1
シマフクロウ	0	0	0	0	8
フクロウ	0	0	0	0	56
モリフクロウ	0	0	0	0	1
ハヤブサ	6	0	0	0	5

## カラス類

種名	高病原性	低病原性	その他鳥フル	判定不能	陰性
ハシボソガラス	20	0	0	0	18
ハシブトガラス	99	0	0	1	58
カラス類	3	0	0	0	11

## その他の鳥類

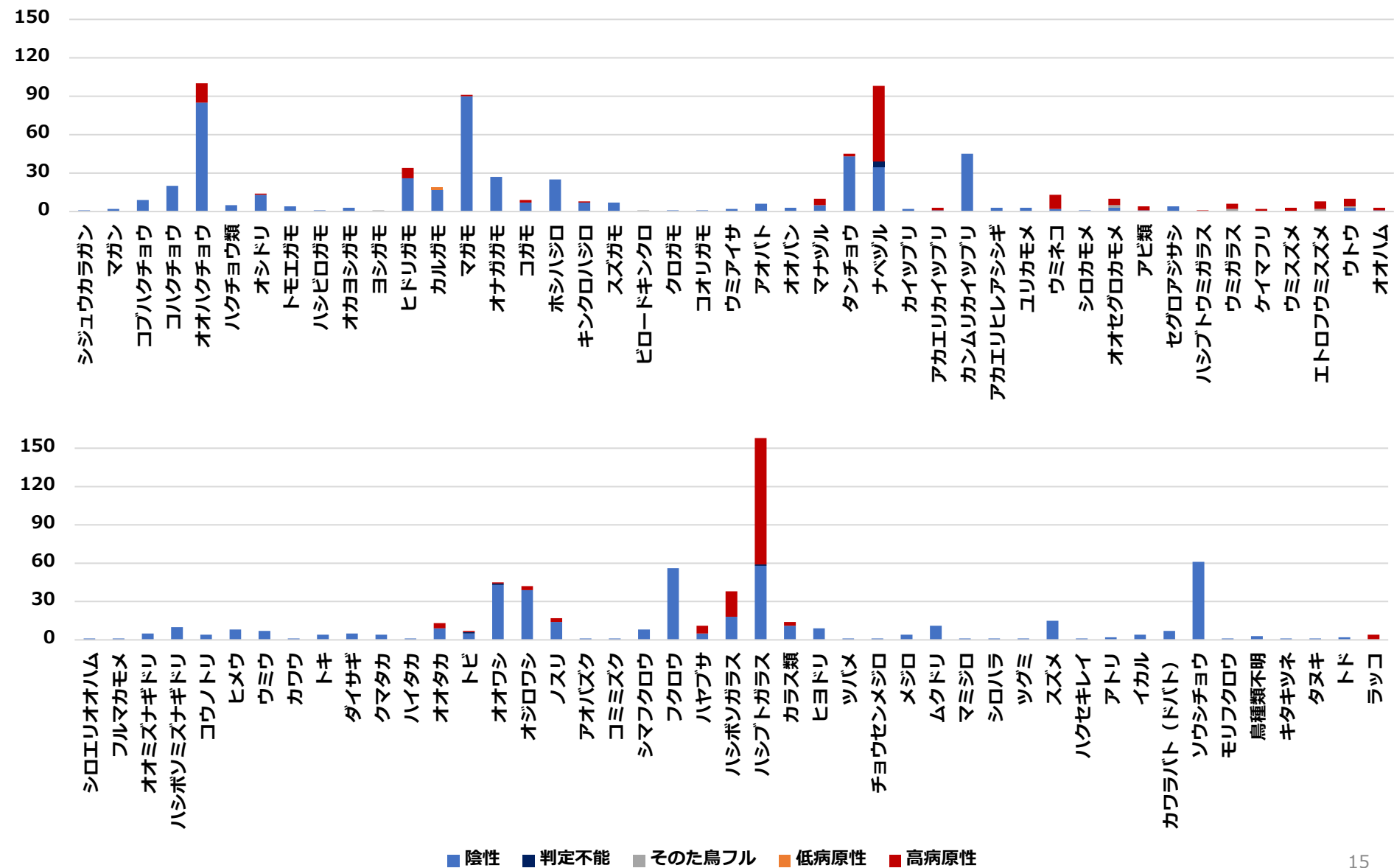
種名	高病原性	低病原性	その他鳥フル	判定不能	陰性
アオバト	0	0	0	0	6
ヒヨドリ	0	0	0	0	9
ツバメ	0	0	0	0	1
チョウセンメジロ	0	0	0	0	1
メジロ	0	0	0	0	4
ムクドリ	0	0	0	0	11
マミジロ	0	0	0	0	1
シロハラ	0	0	0	0	1
ツグミ	0	0	0	0	1
スズメ	0	0	0	0	15
ハクセキレイ	0	0	0	0	1
アトリ	0	0	0	0	2
イカル	0	0	0	0	4
カワラバト(ドバト)	0	0	0	0	7
ソウシチョウ	0	0	0	0	61
鳥種類不明	0	0	0	0	3

## 哺乳類

種名	高病原性	低病原性	その他鳥フル	判定不能	陰性
キタキツネ	0	0	0	0	1
タヌキ	0	0	0	0	1
トド	0	0	0	0	2
ラッコ	4	0	0	0	0

※鳥種の記載順は、  
日本鳥類目録第8版リストによる。

# 2024～2025年シーズンのHPAI発生状況 (種別の検査件数・陽性件数)



# 2024～2025年シーズンのHPAI発生状況（種別事例数）

## その他水鳥類

種名	事例数
オオハクチョウ	15
オシドリ	1
ヒドリガモ	7
マガモ	1
コガモ	2
キンクロハジロ	1
マナヅル	5
タンチョウ	2
ナベヅル	35

## 海鳥類

種名	事例数
アカエリカイツブリ	2
ウミネコ	11
オオセグロカモメ	5
ハシブトウミガラス	1
ウミガラス	4
ケイマフリ	2
ウミスズメ	3
エトロフウミスズメ	5
ウトウ	6
オオハム	2
アビ類	3

## 猛禽類

種名	事例数
オオタカ	5
トビ	1
オオワシ	1
オジロワシ	3
ノスリ	3
ハヤブサ	6

## カラス類

種名	事例数
ハシボソガラス	19
ハシブトガラス	56
カラス類	1

## 哺乳類

種名	事例数
ゼニガタアザラシ	1
ラッコ	4

## 環境試料

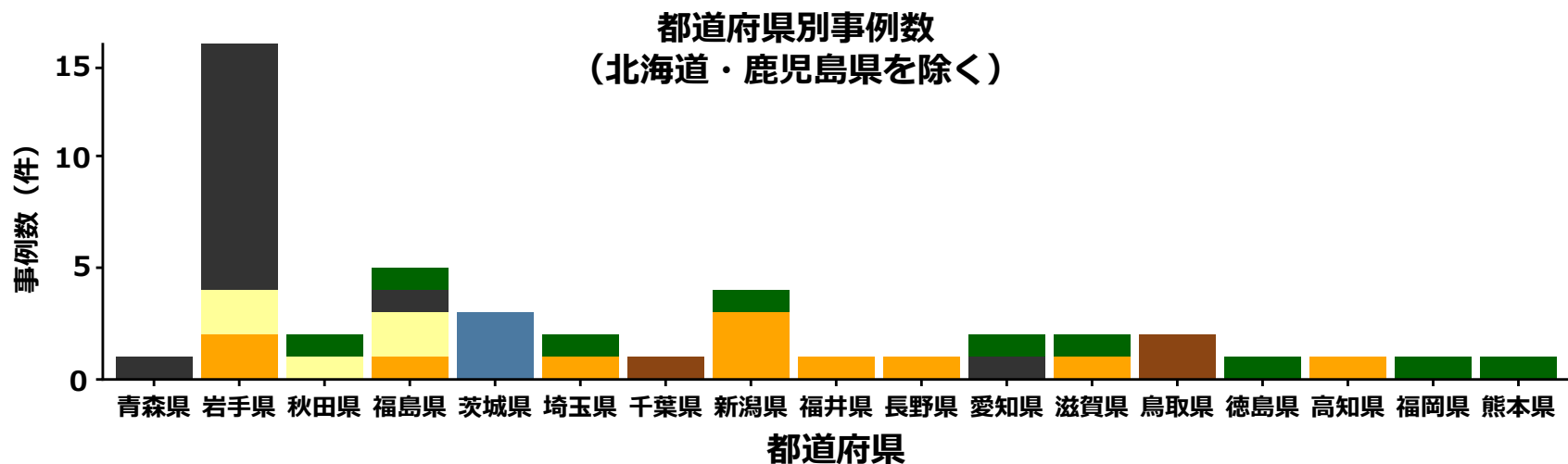
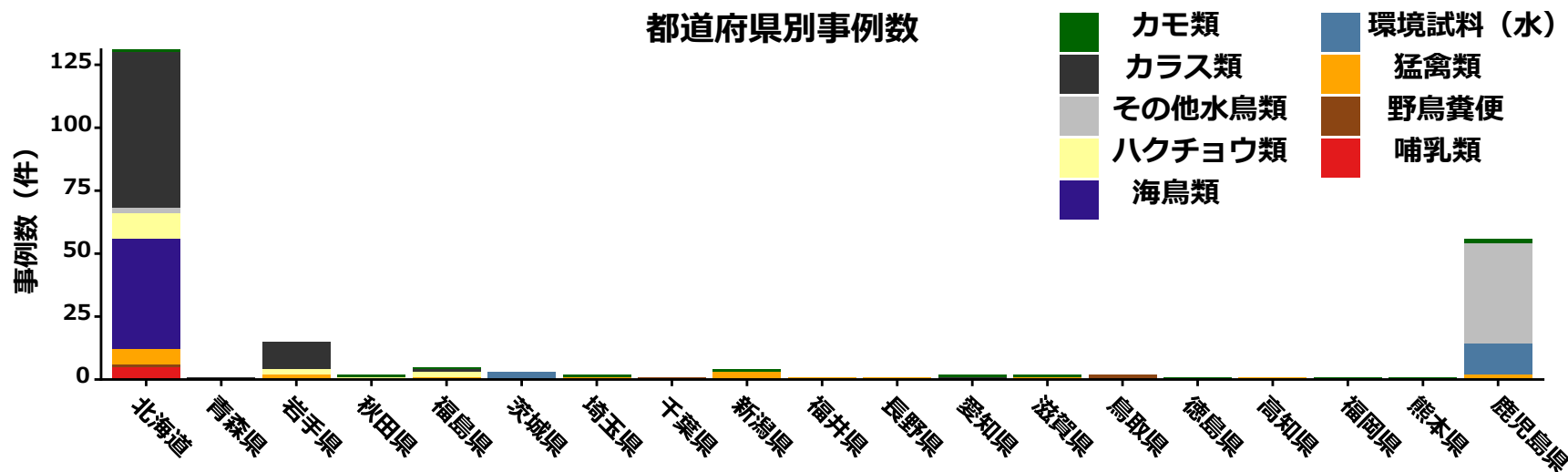
種名	事例数
野鳥糞便	4
環境試料（水）	15

- 30種の鳥類で計227事例（その他水鳥類71事例、猛禽類19事例、カラス類76事例、海鳥類44事例、環境試料19事例）のHPAIV感染が確認された。
- 陽性事例数はハシブトガラスで最も多く、5道県で56事例69羽を確認。

赤字：国内で初めて確認された種

# 2024～2025年シーズンのHPAI発生状況 (都道府県別・野鳥及び哺乳類)

- 野鳥（環境試料含む）の陽性事例 1道18県、227事例
- 哺乳類の陽性事例は1道、5事例
- 北海道で最多の130事例を確認：環境試料1事例を除き、死亡・衰弱野鳥



# 2024～2025年シーズンのHPAI発生道県等による 注意喚起の実施状況

野鳥又は家きんにおけるHPAIが確認された都道府県による報告（計97件）に基づき、以下及び次頁のとおり「餌付けや給餌」、「放し飼い」、「周辺住民等」及び「狩猟者等」に対する注意喚起の実施状況を整理した。

## <餌付けや給餌に対する注意喚起等の対応>

餌付や給餌への対応状況	件数	対応の内容
情報無し（※）	68	<b>公的給餌事業への対応（道県による対応）</b> 給餌者への発生情報提供による注意喚起、異常の速やかな通報の依頼（北海道タンチョウ）
該当事例の確認なし	22	
実施	7	<b>組織や個人による餌やりへの対応（道県による対応）</b> 看板の設置（情報提供、現地確認に基づく） 個人に対する注意喚起（通報、現地確認に基づく）
<b>計</b>	<b>97</b>	
※ 調査票への記載なし、または注意喚起の調査票なし		<b>組織や個人による餌やりへの対応（市町村による対応）</b> 個人に対する注意喚起（通報、現地確認に基づく）

## <放し飼いにに対する注意喚起等の対応>

放し飼いへの対応状況	件数	対応の内容
情報無し（※）	68	<b>組織や個人による放し飼いへの対応（県による対応）</b> 県ホームページ上で注意喚起（発生情報、給餌・放し飼いの自粛依頼）
該当事例の確認なし	28	
実施	1	
<b>計</b>	<b>97</b>	

※ 調査票への記載なし、または注意喚起の調査票なし

# 2024～2025年シーズンのHPAI発生道県等による 注意喚起の実施状況（つづき）

## <周辺住民等に対する注意喚起等の対応>

周辺住民等への対応状況	件数
情報なし（※）	51
実施せず（※※）	11
実施	35
<b>計</b>	<b>97</b>

※ 調査票への記載なし、または注意喚起の調査票なし

※※ なし、実施なし、該当なし、周辺に住民／住居なし等と回答のあったもの

## 都道府県による注意喚起等の対応

方法	内容
<ul style="list-style-type: none"> <li>市町村への情報提供、注意喚起、周辺住民への注意喚起依頼</li> <li>ホームページ上での情報提供・注意喚起</li> <li>報道（テレビ、新聞等）による情報発信</li> <li>発生地点周辺住民への直接の注意喚起</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>高病原性鳥インフルエンザ発生に係る情報</li> <li>野鳥監視重点区域の指定状況</li> <li>死亡野鳥等発見時の通報依頼・連絡先</li> <li>死亡野鳥等発見時の対応・注意事項</li> <li>野鳥や野生動物との接し方</li> </ul>

## 市町村による注意喚起等の対応

方法	内容
<ul style="list-style-type: none"> <li>ホームページ上で情報提供・注意喚起</li> <li>総合案内（市）における周知</li> <li>ホームページ上及び回覧板で注意喚起（町）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>高病原性鳥インフルエンザ発生に係る情報</li> <li>死亡野鳥等発見時の連絡先</li> </ul>

# 2024～2025年シーズンのHPAI発生道県等による 注意喚起の実施状況（つづき）

## <狩猟者に対する注意喚起等の対応>

狩猟者への対応状況	件数
情報なし（※）	53
実施せず（※※）	10
実施	34
<b>計</b>	<b>97</b>

※ 調査票への記載なし、または注意喚起の調査票なし  
 ※※ なし、該当なし、狩猟者なし、特定の地域で狩猟鳥獣の大量死が起こっている状況ではないため実施せず等と回答のあったもの

## 都道府県による注意喚起等の対応

方法	内容
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 県や地元猟友会への注意喚起、猟友会を通じた会員への周知（通知文等）</li> <li>・ 狩猟者向けチラシ、リーフレットの配布（狩猟者登録時）</li> <li>・ ホームページ上での情報提供・注意喚起</li> <li>・ 報道（テレビ、新聞等）による情報発信・注意喚起</li> <li>・ 鳥獣保護管理員に対する情報共有・注意喚起（狩猟者への巡回指導のため）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 野鳥の高病原性鳥インフルエンザの発生状況</li> <li>・ 狩猟自粛依頼（発生市町村及びその周辺等）</li> <li>・ 狩猟時の適切な消毒・野鳥の取り扱い等</li> <li>・ 死亡野鳥等発見時の通報依頼・連絡先</li> <li>・ 死亡野鳥等発見時の対応・注意事項</li> </ul>

## 市町村による注意喚起等の対応

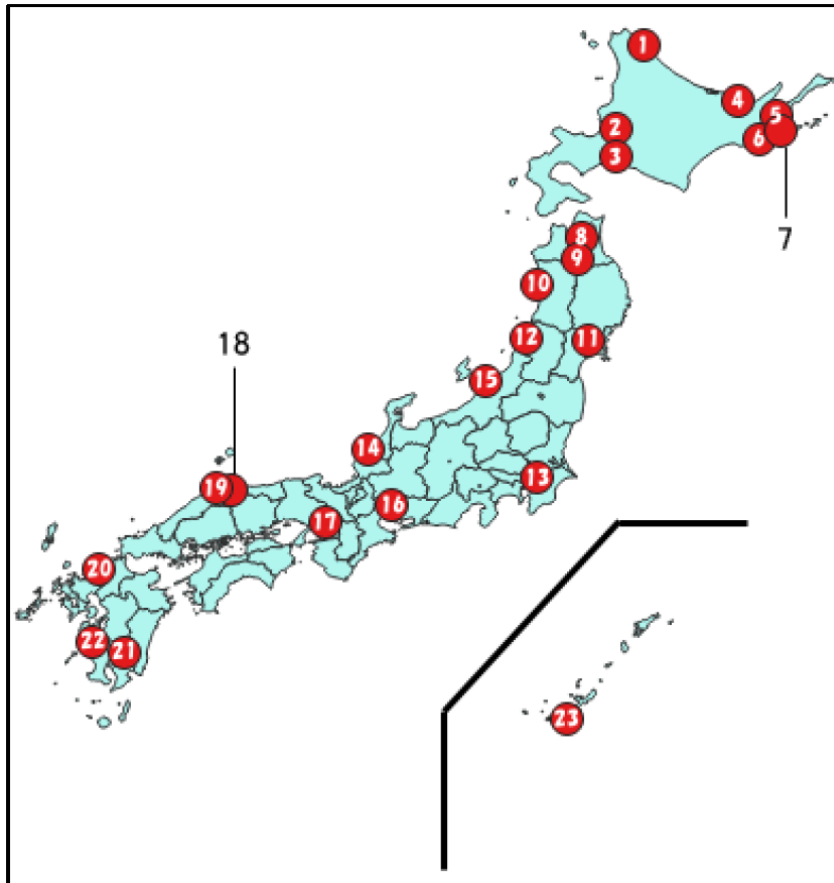
方法	内容
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ ホームページ上で情報提供・注意喚起</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 野鳥の高病原性鳥インフルエンザの発生状況</li> <li>・ 死亡野鳥等発見時の通報依頼・連絡先</li> <li>・ 死亡野鳥等発見時の対応・注意事項</li> </ul>

# 2024～2025年シーズンの渡り鳥の状況

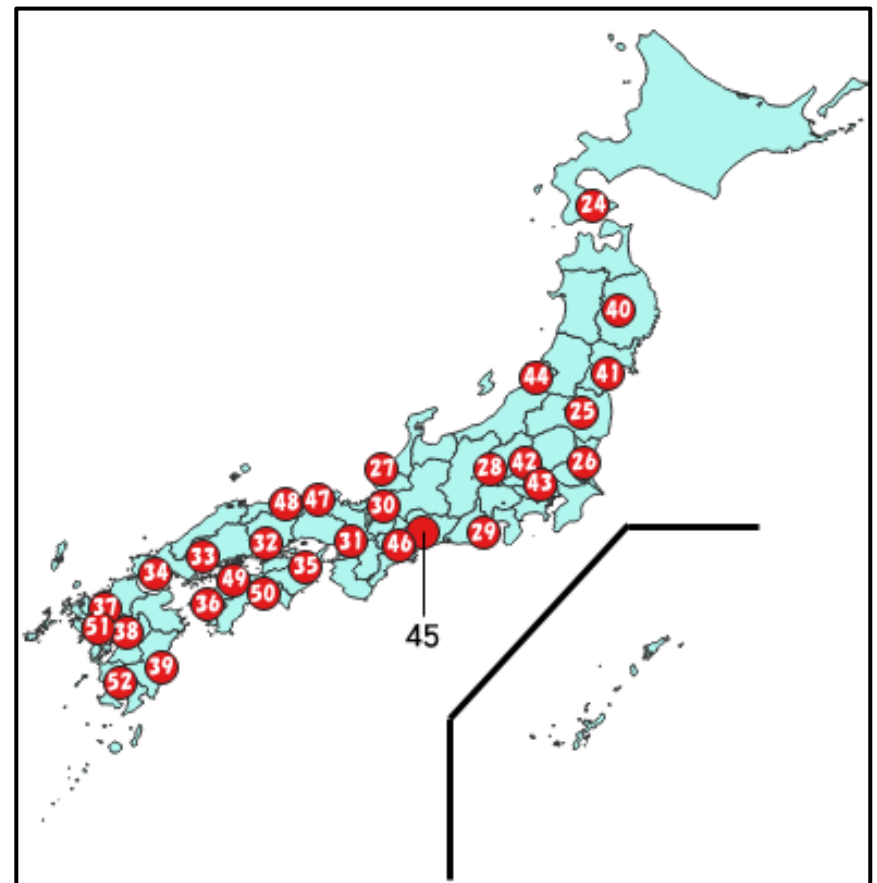
## 渡り鳥飛来情報収集調査（全体的な傾向）

- 全国52か所で9月から5月（一部は10月から3月）にかけて、月2～3回、渡り鳥の種と個体数を把握するための調査を実施した。
- 研究活動への活用も想定し、知見を蓄積している。

9月から5月まで月3回調査を実施している地点



10月から3月まで月2回調査を実施している地点



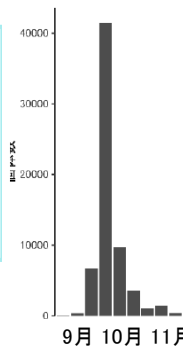
# 2024~2025年シーズンの渡り鳥の状況

ガンカモ類の主要な渡来地における飛来状況

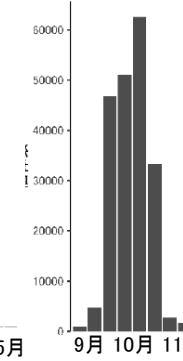
## ガン・カモ類の飛来数合計

- 結氷する北海道では秋と春の双極性のピークが出現した。
- 本州以南では12月前後にピークが出現した。

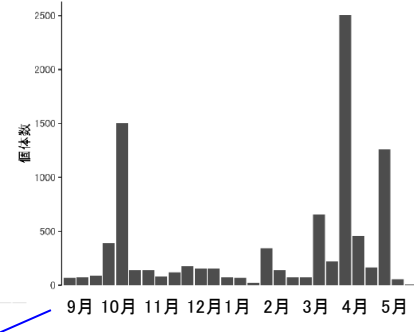
(2) 宮島沼



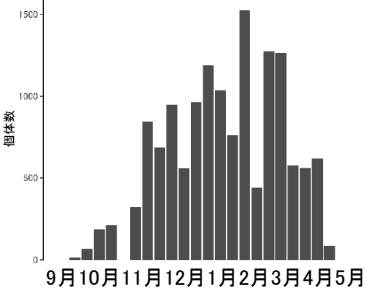
(1) 浜頓別クッチャロ湖



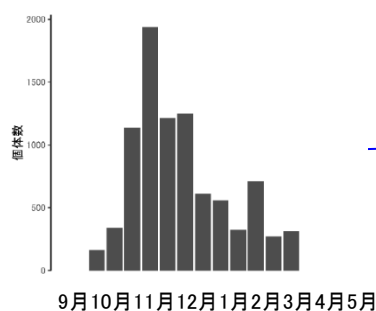
(4) 溝渇湖



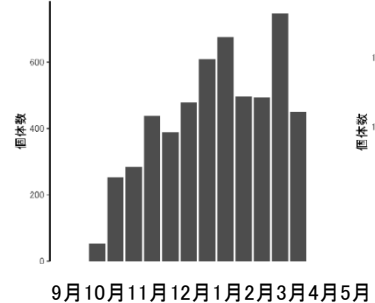
(22) 出水・高尾野



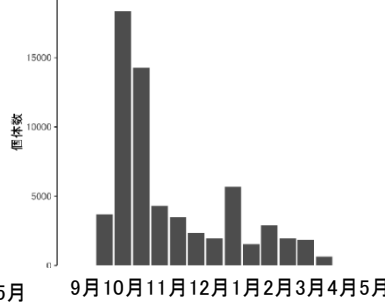
(52) 鹿児島湾奥部



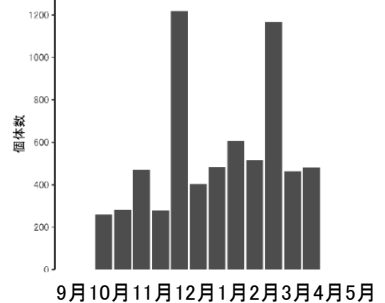
(31) 大阪城公園



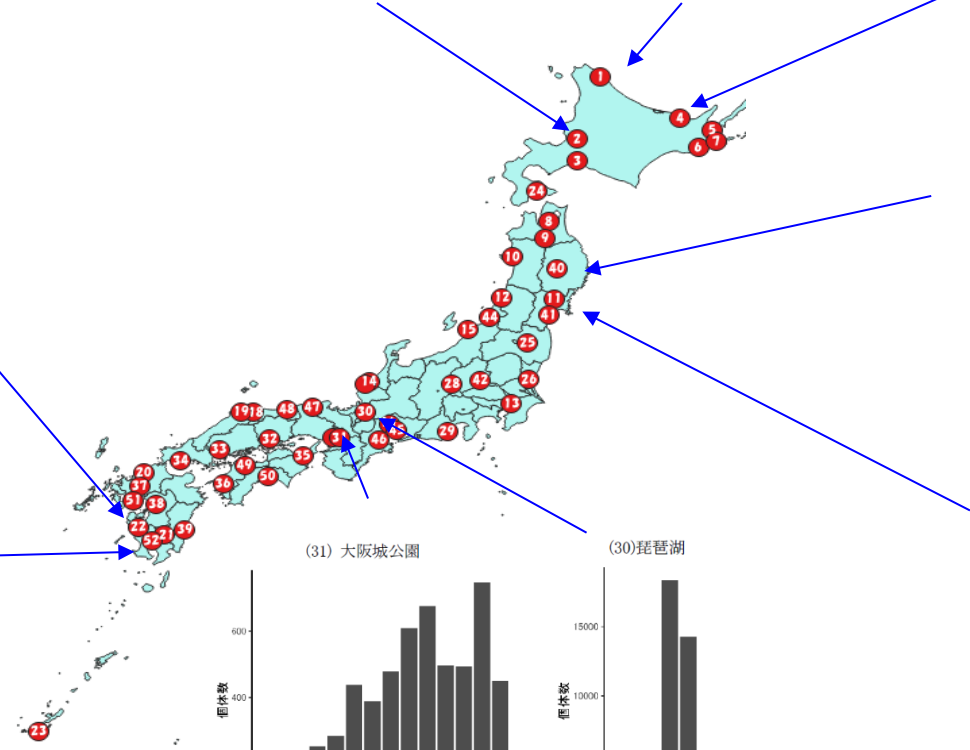
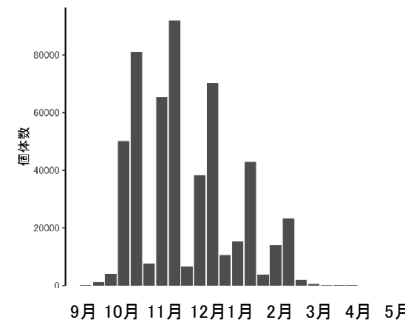
(30) 琵琶湖



(40) 高松の池



(11) 伊豆沼



# 2024～2025年シーズンの渡り鳥の状況

ガンカモ類の主要な渡来地における飛来状況

- 種別にガンカモ類の飛来状況を把握し、HP上で国民に情報提供した。  
(例として、昨年度に陽性事例の多かったオオハクチョウとヒドリガモを掲載)

## オオハクチョウ



## ヒドリガモ

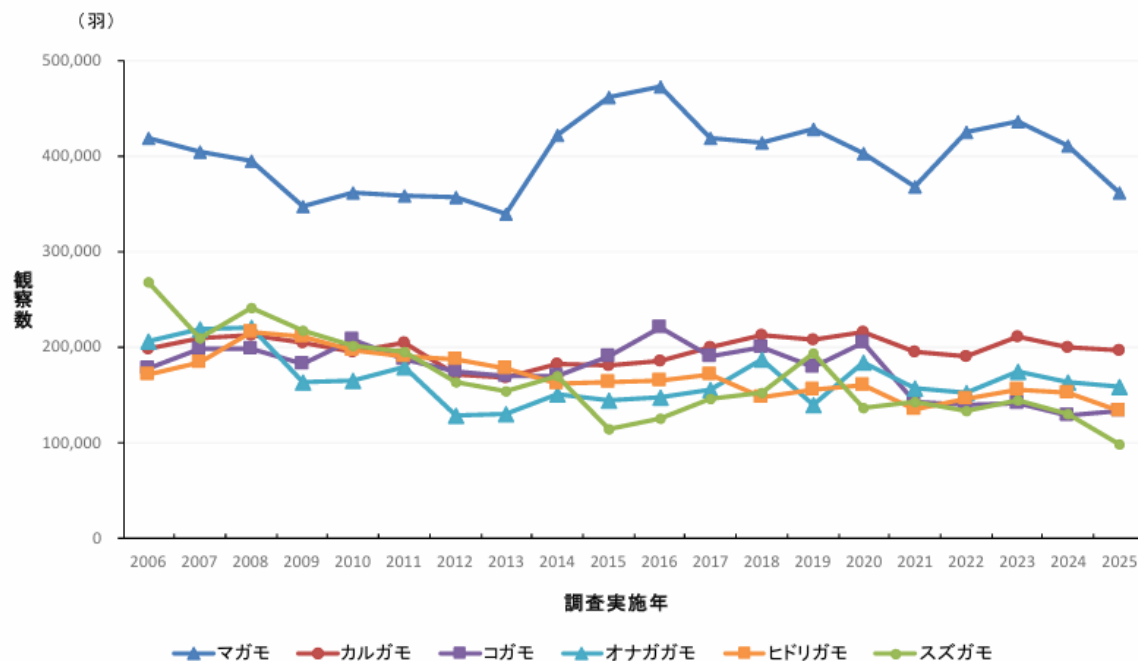


# 2024～2025年シーズンの渡り鳥の状況

## ガンカモ類の生息調査

- 都道府県等の協力を得て、1月中旬に全国約8,700地点の湖沼等で調査を実施。
- 全地点のうち約6,400地点でガンカモ類が観察され、ハクチョウ類（4種）約7万3,700羽、ガン類（8種）約28万2,900羽、カモ類（32種）約152万6,600羽が観察された。
- 10年前の観察数と比べ、ハクチョウ類は約6%（約4,000羽）増加、ガン類は約34%（約7万1,000羽）増加、カモ類は約5%（約7万8,200羽）減少となった。

- カモ類のうち観察数の多い上位6種の個体数を前年と比較すると、マガモ（検査優先種2）が約12%、カルガモ（検査優先種3）が約2%、コガモ（検査優先種3）が約4%、オナガガモ（検査優先種2）が約3%、ヒドリガモ（検査優先種1）が約13%、スズガモ（検査優先種2）が約24%減少していた。



### 過去20年間のカモ類の種別観察数の推移

(第56回ガンカモ類の生息調査(全国一斉調査)結果(速報)より引用)  
[https://www.env.go.jp/press/111163\\_00007.html](https://www.env.go.jp/press/111163_00007.html)

# 2024～2025年シーズンのまとめと考察

## ■発生時期について

- ・ シーズン初のHPAI陽性事例は、2024年9月30日に北海道乙部町で回収されたハヤブサ。
- ・ 過去2番目に早い発生（1番早い発生は2022～2023年シーズンの9月25日）。

**☆ ハヤブサはHPAIVを保有する野鳥を捕食して二次感染した可能性が考えられることから、これより早期に飛来した渡り鳥によってHPAIVが国内に持ち込まれた可能性がある。**

- ・ シーズン最後のHPAI陽性事例は、北海道釧路市で2025年6月17日に回収されたオジロワシ。
- ・ 4月に入ってから道東地域において海鳥及び海棲哺乳類の続発事例が発生し、シーズンが長期化。

**☆ 国内のウイルス侵入の早期化、蔓延の長期化傾向がみられる。**

## ■陽性が確認された種について

- ・ その他水鳥類、カラス類、猛禽類の陽性事例が、いずれも広い範囲で確認された。
- ・ 陽性事例数はハシブトガラスが最多で、5道県で56事例69羽を確認（2023～2024年シーズンは67事例、265羽）。
- ・ 4月以降、道東地域において海鳥の続発事例と海棲哺乳類の感染が確認され、これまで国内での感染報告がなかった多くの種で感染が確認された：アカエリカイツブリ、ハシブトウミガラス、ウミガラス、ケイマフリ、ウミスズメ、エトロフウミスズメ、ウトウ、オオハム、アビ類、ゼニガタアザラシ、ラッコ（下線は国内希少野生動植物種又は絶滅危惧種）。

**☆ 希少種を含めこれまで感染が確認されていない種についても、感染リスクが高まっていると考えられる。**

## ■発生地域について

- ・ 近年のシーズン同様、北海道から九州まで、全国で野鳥の感染が確認された。
- ・ カラス類の発生は東北以北を中心に、海鳥は道東地域に集中して確認された。

**☆ 野鳥におけるHPAIV感染機会の広域化傾向がみられる。**

# 海外の発生状況

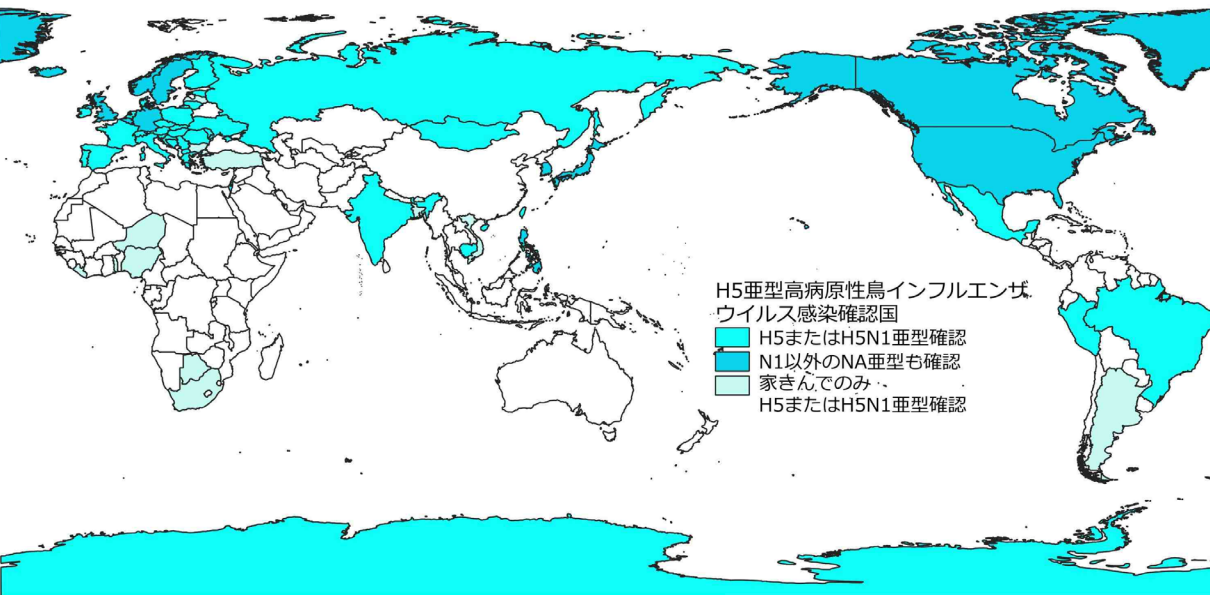
2024年9月～2025年7月

# 野生鳥類発生概要

地域	国/地域*数	件数	H5	H5N1	H5N2	H5N5
アジア	8	262	17	244	1	
ヨーロッパ	33	1,740	9	1,641		90
中東	1	7	0	7		
北米	2	4,177	1,536	2,566	6	69
中南米	8	82	32	50		
合計	52	6,268	1,594	4,508	7	159

- 発生報告件数は昨シーズン同期間（3,605件）よりも多かった。
- アフリカからの報告はなかった。
- 亜型はH5N1亜型が中心であった。H5N5亜型はヨーロッパ北部及び北米で確認された。H5N5亜型は日本では2024年3～4月に確認されたが、今シーズンは検出されなかった。

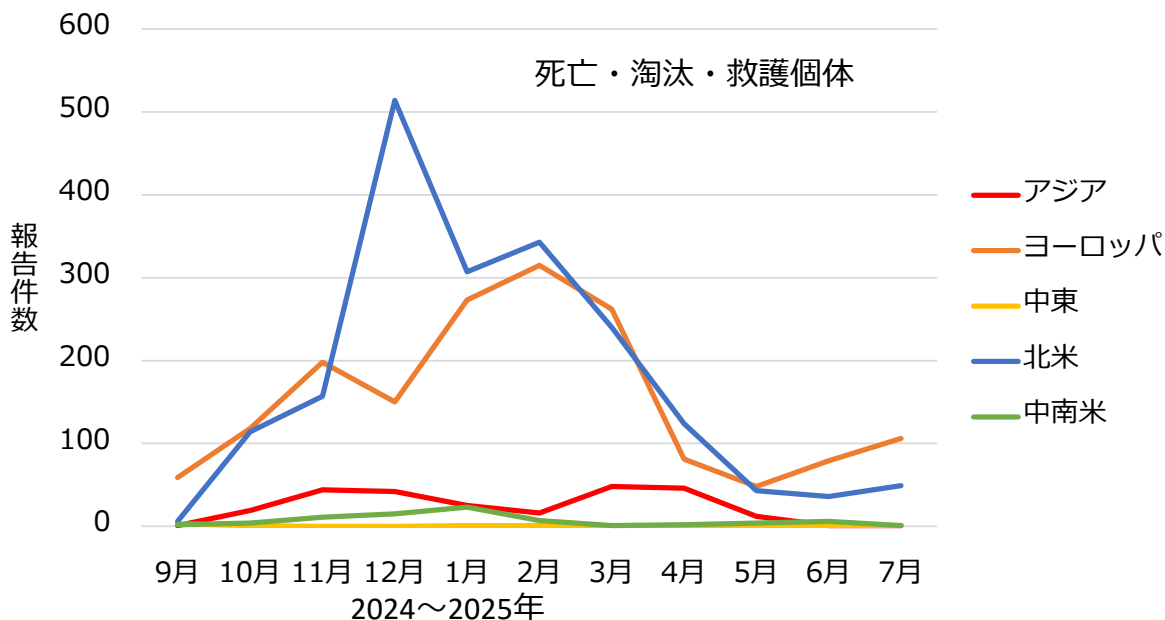
\* 極東ロシアはアジアに含めた。海外領土等、国とは別途カウントしている地域がある。  
南極・亜南極地域は中南米に含めた。



- 表に含まれない国として、モンゴルで環境試料（糞便）1件からの検出報告があった。
- 表に含まれない亜型としては、韓国で環境試料（糞便）からH5N3亜型が1件検出された。
- 対象期間中に家きんではH7亜型HPAIV感染が4カ国で報告されたが、野鳥の感染報告はなかった。

H5亜型HPAIV感染確認国（2024年9月～2025年7月）

# 地域別報告件数



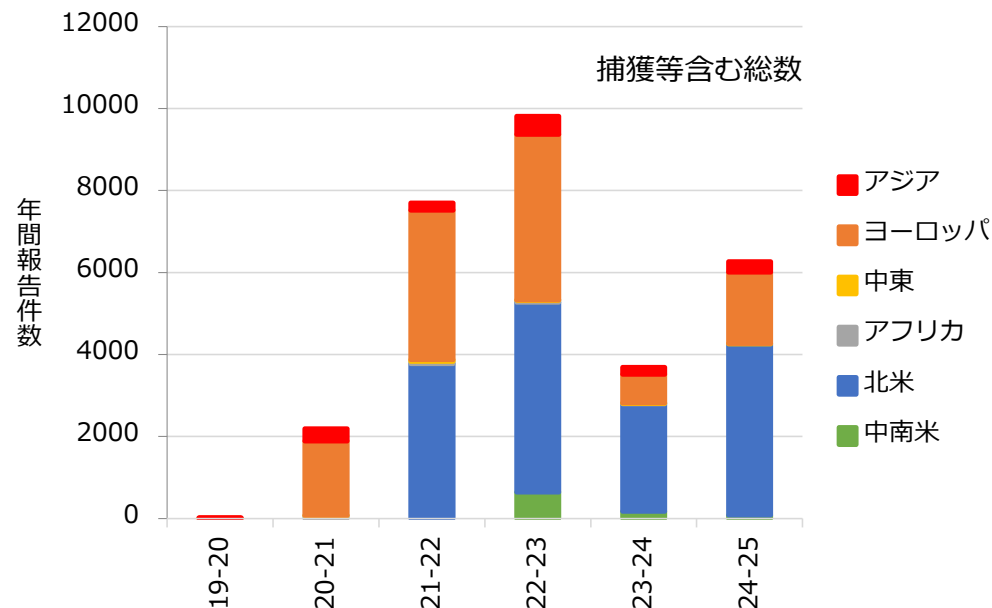
- どの地域も報告件数が多かったのは10月～4月で、繁殖期（5～7月）の報告件数は多くなかった。

- 報告件数は北米が多く、特に12月の件数が多かった。アメリカでは死亡野鳥よりも検査捕獲個体からの検出の方が多かった。

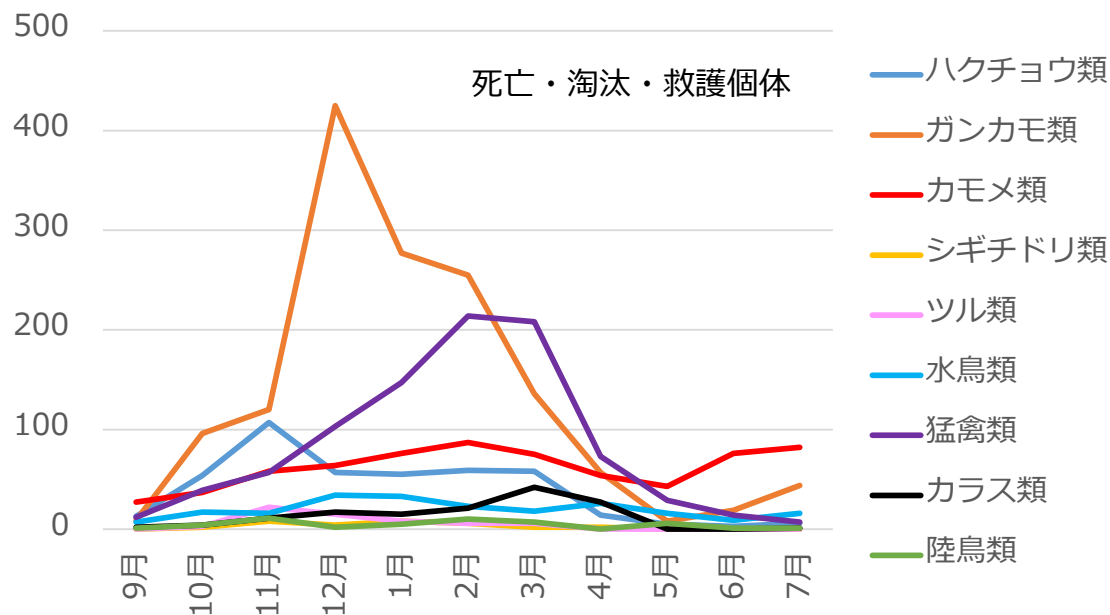
- 次に多かったのはヨーロッパで、報告が最も多かったのは2月であった。

- アジアは日本の報告が多く、11～12月と3～4月に感染確認が多かった。

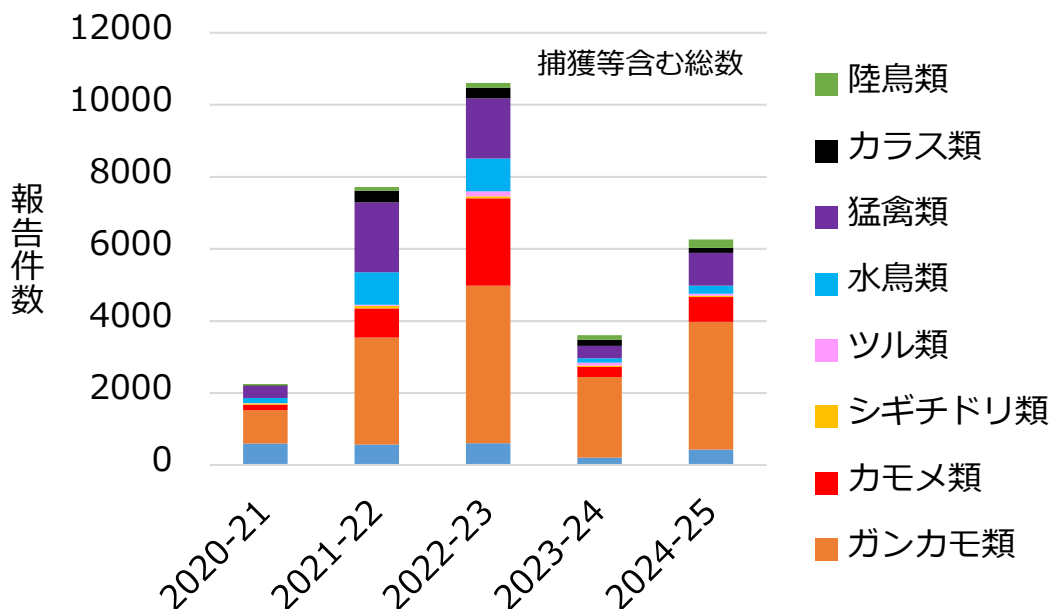
- 中南米から南極にかけての地域では9月～1月に感染確認の報告があり、10～11月に集団死が確認された。



# 鳥の種類別発生状況



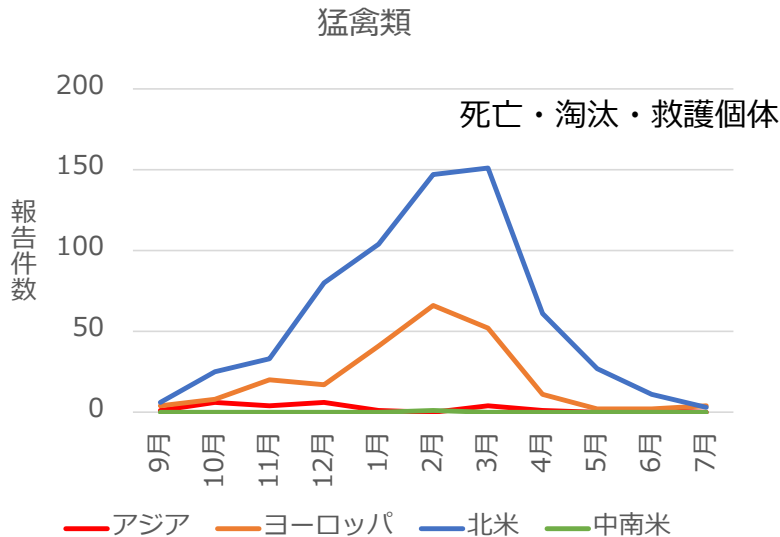
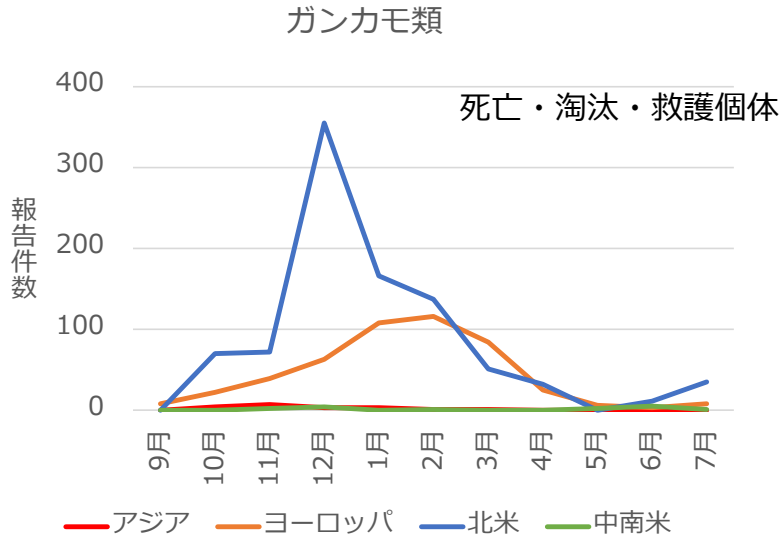
- 感染報告が多いのはガンカモ類で、次は猛禽類だった。
- ハクチョウ類、ツル類は例年同様、シーズン初期の11月頃の感染が多かった。



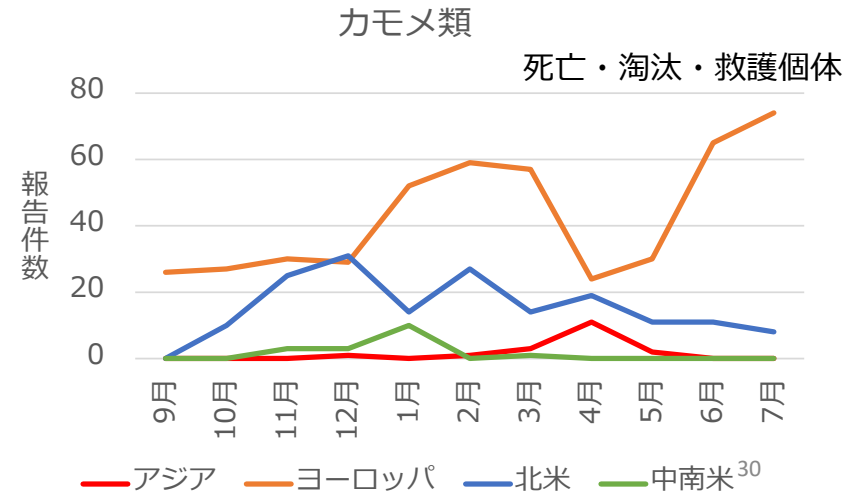
鳥の種類別報告件数（総数）

種類	件数	割合
ハクチョウ類	434	7%
ガンカモ類	3,546	57%
カモメ類	686	11%
シギチドリ類	34	1%
ツル類	60	1%
水鳥類	218	3%
猛禽類	910	15%
カラス類	144	2%
陸鳥類	233	4%
不明	3	0%
合計	6,268	100%

# 鳥の種類別発生時期



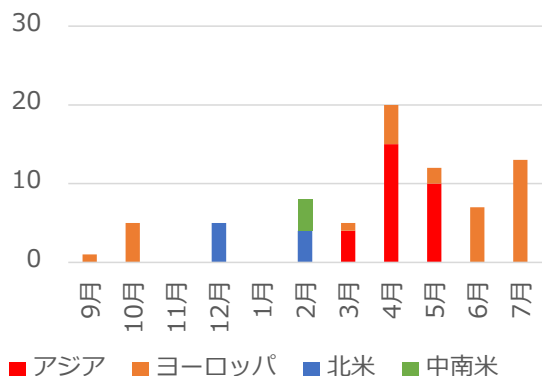
- ガンカモ類の死亡個体等の報告件数は12月に増加し、2月頃まで多かった。北米の数が多かったが、その多くはガンカモ類であった。中南米でも、報告件数は少ないが、12月にメキシコでハクガンとカナダガンの合計1,000羽以上の死亡があった。
- 猛禽類の報告が増加するのはガンカモ類よりやや遅く、12月以降、特に2～3月に増加した。
- カモメ類は年間を通して報告があり、他の地域では減少傾向となった5月以降、ヨーロッパで再び報告が増加している。



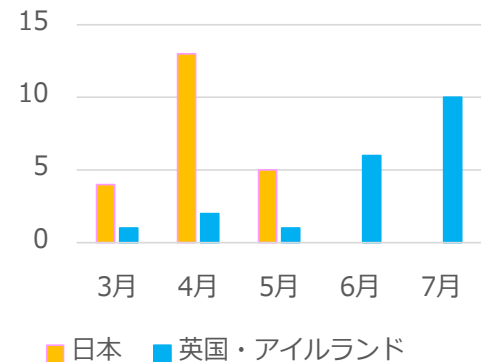
# 水鳥類・ツル類の発生状況

- 水鳥類には表の11目16科を含めた。報告個体数が多かったのはペンギン科とペリカン科。
- 海鳥類（カイツブリ科、ウミスズメ科、アビ科、カツオドリ科）の感染確認報告はアジア、ヨーロッパでは10月と3月以降にあり、12～2月は北米、中南米であった。
- ウミスズメ科は日本の他、英国及びアイルランド、ドイツでウミガラス等5種の報告があった。

海鳥類

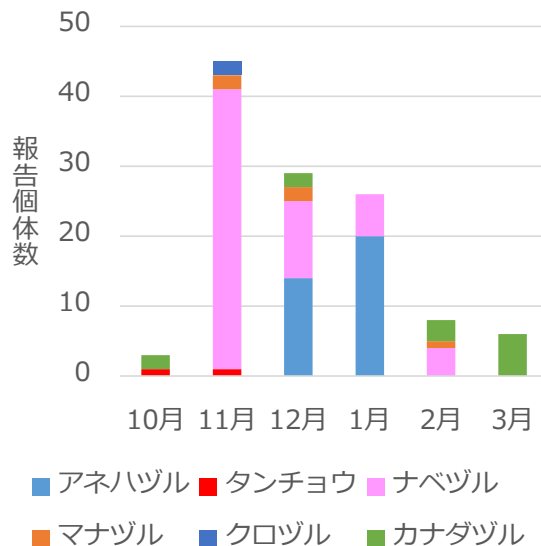


ウミスズメ科



- アビ科とカイツブリ科の鳥類は日本の他にアメリカで感染確認があった。
- ツル類は10～3月にアジア、ヨーロッパ、北米から6種の報告があった。

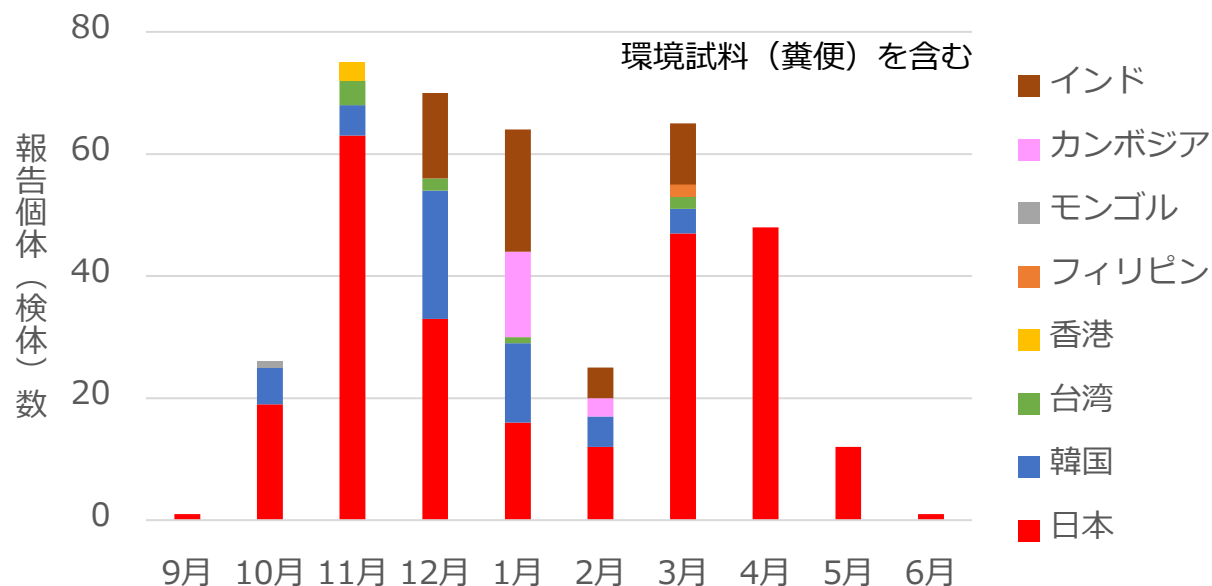
ツル類



水鳥類・ツル類の分類別報告個体数

目	科	報告個体数
ツル目	クイナ科	6
	ツル科	117
カイツブリ目	カイツブリ科	9
フラミンゴ目	フラミンゴ科	1
チドリ目	ウミスズメ科	43
アビ目	アビ科	7
ペンギン目	ペンギン科	2,432
ミズナギドリ目	アホウドリ科	156
	ミズナギドリ科	49
コウノトリ目	コウノトリ科	13
カツオドリ目	カツオドリ科	17
	ヘビウ科	2
	ウ科	82
ペリカン目	トキ科	11
	サギ科	57
	ペリカン科	738
ブッポウソウ目	カワセミ科	1

# アジアの発生状況



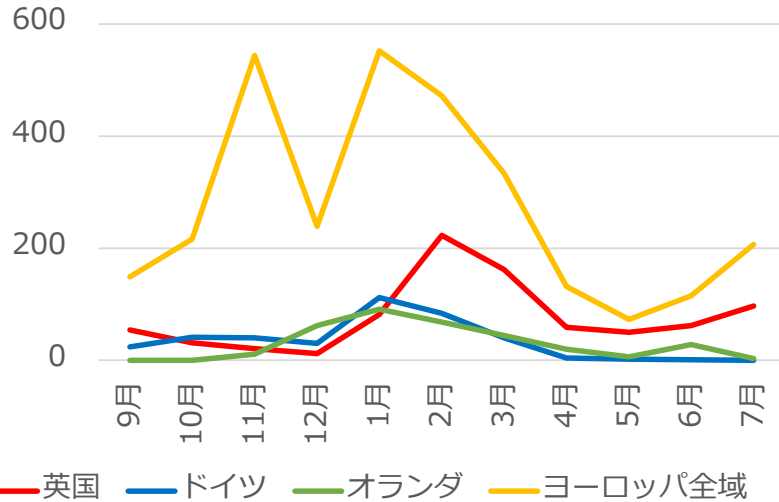
日本と韓国の鳥の種類別報告検体数（9 - 6月）

種類	日本	韓国
ハクチョウ類	15	1
ガン類	0	2
カモ類	13	9
カモメ類	16	2
ツル類	68	0
水鳥類	29	24
猛禽類	19	4
カラス類	88	0
糞便	4	12
環境水	42	0

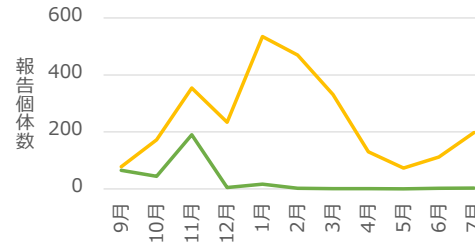
- アジア地域では糞便からの検出が他地域よりも多く報告された。
- 9月以降、地域で最初の検出報告は9月の日本の死亡個体で、10月には韓国（糞便・捕獲個体・死亡個体）、モンゴル（糞便）、11月には台湾（死亡個体）、香港（糞便、死亡個体）から検出報告があった。
- 報告数が多いのは日本で、韓国が続いた。日本と韓国の発生を比較すると、感染検体数が最大となったのは日本は11月、韓国は12月で、日本の方が早かった。日本は3～4月に感染数が再度増加したが、韓国では増加はなく3月で終息した。
- 日本と韓国では感染種に差があり、日本ではツル類やカラス類が多く、3～4月にはカモメ類や海鳥類が多かったのに対し、韓国ではダイサギの報告が多かった。
- 12～1月にインドでアネハヅル約30羽の集団死が報告された。1月にカンボジアで湖岸で衰弱・死亡していた野鳥（種不明）14羽の報告があった。
- ウイルスの亜型はH5N1亜型が中心であったが、日本でH5N2亜型1件（ハヤブサ、4月）、韓国でH5N3亜型1件（オナガガモの糞便、10月）が確認された。

# ヨーロッパと英国の発生状況

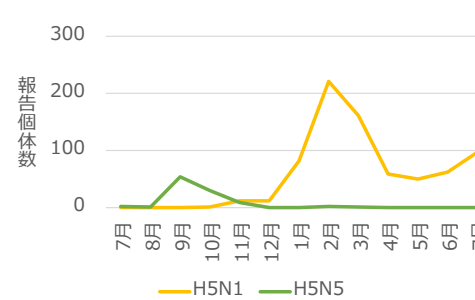
ヨーロッパ



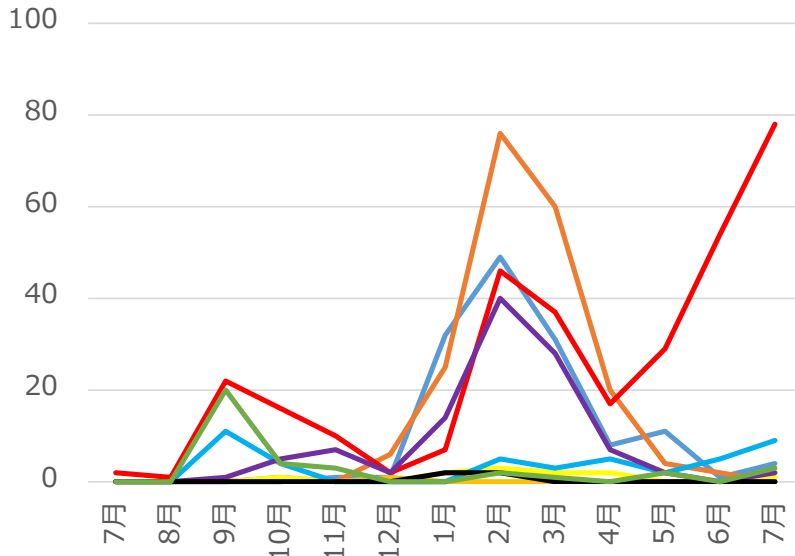
ヨーロッパ



英国



英国



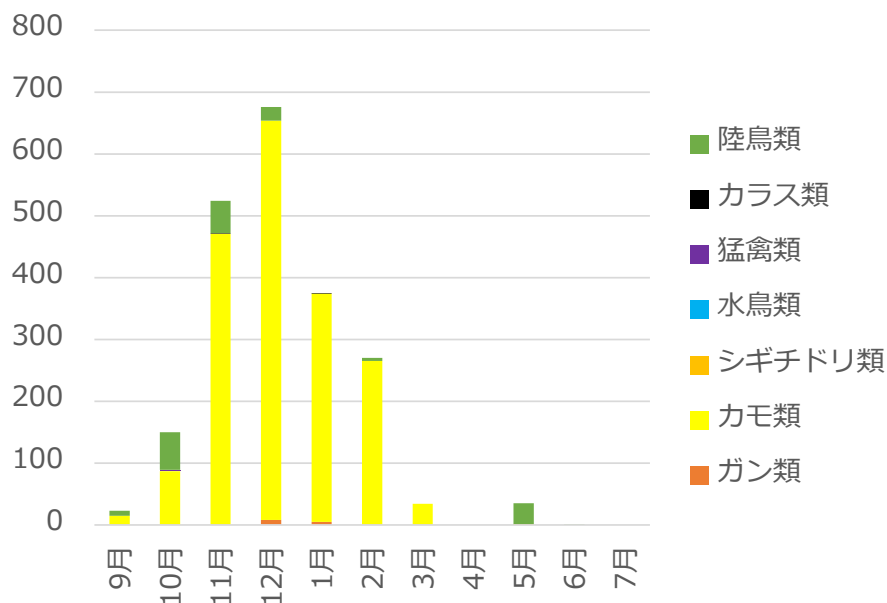
- ハクチョウ類
- ガン類
- カモ類
- カモメ類
- シギチドリ類
- 水鳥類
- 猛禽類
- カラス類
- 陸鳥類

- ヨーロッパの中では英国、オランダ、ドイツが報告数、報告個体数とも多く、これら3カ国で全体の半数以上を占めた。
- 特に英国の報告数が例年よりも多かった。
- 12月までのH5N1亜型の感染は主に上記3カ国以外での確認であった。
- H5N5 亜型の感染が9～11月にみられ、11月にはノルウェーでカモメ類の集団死があった。
- 英国の報告数には9月と2月の2回のピークがあり、それぞれH5N5亜型、H5N1亜型の感染が中心であった。
- 英国では両亜型でカモメ類、ウ科、カツオドリ科鳥類の感染が確認された。他に H5N5亜型感染はフルマカモメ（ミズナギドリ科）、キジで確認され、H5N1亜型感染はガン類、猛禽類、サギ科、ウミスズメ科で確認された。

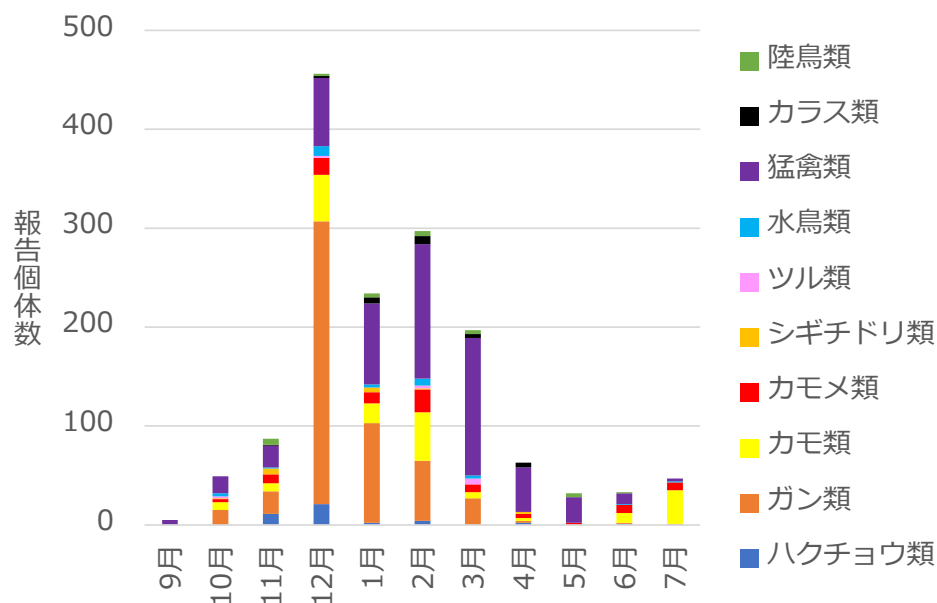
# アメリカの発生状況

- アメリカではカモ類の捕獲検査は周年実施されているが、捕獲カモ類でのH5亜型HPAIVの検出は8月に始まり11月から急増し、3月には減少した。
- 死亡野鳥からの検出は12月にガン類で急増し、猛禽類は2～3月が多かった。猛禽類で報告が多かったのはハクトウワシ、アカオノスリ、クロコンドル、ヒメコンドル、アメリカワシミミズクだった。
- 捕獲による陸鳥類からの検出も多く、ドバト、イエスズメ、ホシムクドリ、オナガクロムクドリモドキ等から多く検出された。これらは農場周辺の捕獲調査と推測された。

捕獲個体



死亡等個体

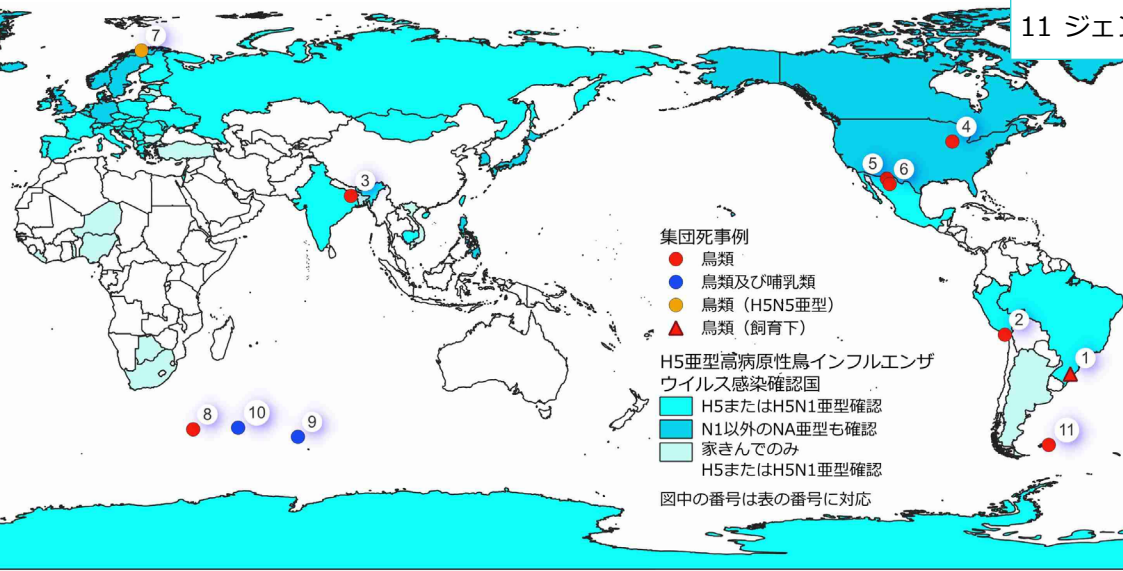


# 集団死事例

- 対象期間中のWOAHへの報告において、1件で100個体以上の野鳥死亡報告件数は5件で、昨年度（11件）よりも少なかった。
- 他に政府公表事例及び文献や報道事例、飼育下事例を表に追加した。
- 死亡数が特に多かったのはフォークランド諸島のジェンツーペンギンとメキシコのハクガン。
- 野生哺乳類は亜南極島嶼において鳥類と共にミナミゾウアザラシの集団死が文献により報告されている。

番号	種	国	発生時期	報告個体数
1	コクチョウ・クロエリハクチョウ（飼育下）*	ブラジル	2025年5-6月	162
2	ペルーペリカン*	ペルー	2025年4月	700
3	イエガラス	インド	2025年2-3月	100以上
4	ウミアイサ	アメリカ	2025年1-2月	約300
5	ハクガン*	メキシコ	2024年12月	1,000
6	ハクガン・カナダガン*	メキシコ	2024年12月	800
7	セグロカモメ・オオカモメ*	ノルウェー	2024年11月	170
8	ワタリアホウドリ オウサマペンギン	マリオン島	2024年11月	150 120
9	ミナミゾウアザラシ オウサマペンギン ミナミオトウゾクカモメ ミナミオオセグロカモメ	ケルゲレン諸島	2024年10-11月	数百
10	ミナミゾウアザラシ オウサマペンギン ミナミオトウゾクカモメ ミナミオオセグロカモメ	クロゼ諸島	2024年10-11月	数百
11	ジェンツーペンギン*	フォークランド諸島	2024年10月	2,300

\* WOAHへ1件で100個体以上の死亡が報告されている事例。

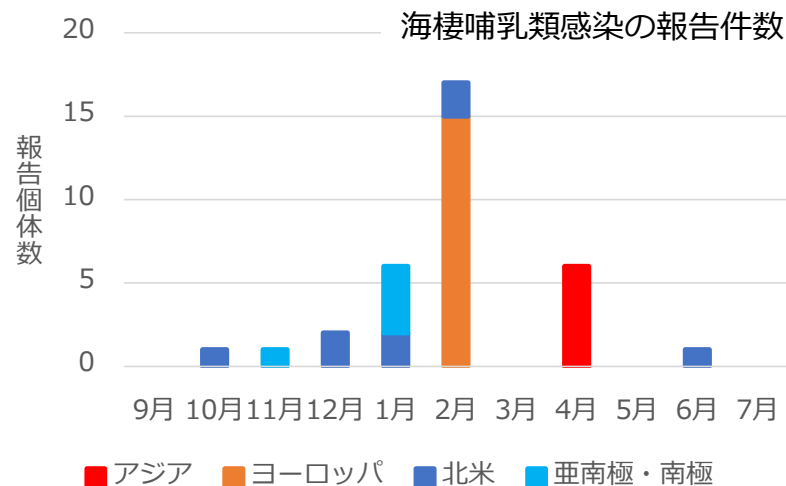


- 原因HPAIVの亜型は、多くはH5N1亜型であったが、11月のノルウェーのカモメ類はH5N5亜型であった。

# 野生哺乳類等の感染状況

## 海棲哺乳類

- 日本の北海道で2025年4月にゼニガタアザラシとラッコの感染が確認された。
- 2月に英国でハイイロアザラシ死亡個体40頭中15頭でH5N5亜型HPAIV感染が確認された。
- 11月に亜南極でミナミゾウアザラシ、1月に南極でアザラシ類3種で感染が確認された。
- アメリカではゼニガタアザラシとハンドウイルカの感染確認が散発的に報告された。



## 陸棲哺乳類

- 主に北米及びヨーロッパからアカギツネ、シマスカンク、アライグマ、ヨーロッパカワウソ、アメリカクロクマ等の食肉目の感染が報告された。
- アメリカでは、齧歯類等の報告件数が増加した（農場周辺調査によるものと推測）。
- 韓国で3月にベンガルヤマネコ（国内に生息するツシマヤマネコやイリオモテヤマネコは同じ系統の種）の死亡個体1頭の感染確認が報告された。

## 亜型

- H5N5亜型HPAIVの哺乳類への感染がヨーロッパのアカギツネ等で確認された。
- 2025年5月英国のハイイロアザラシからH7N1亜型LPAIVが検出されたが死因との関連性は不明とされている。

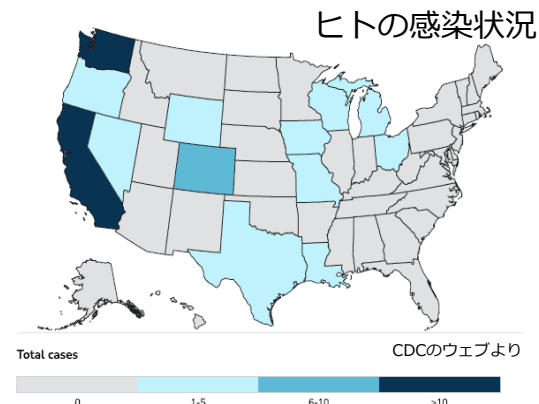
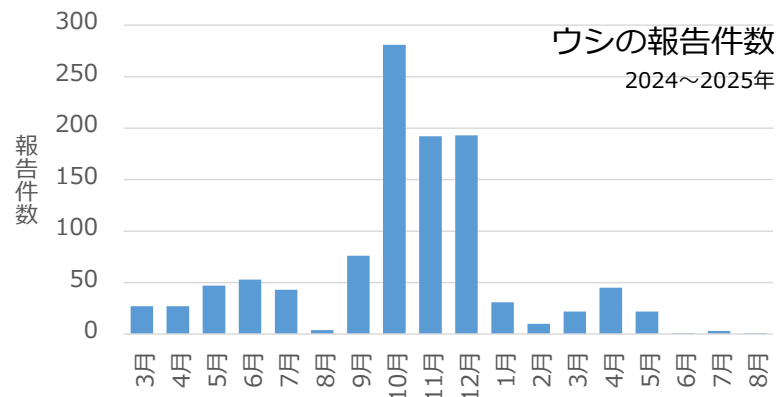
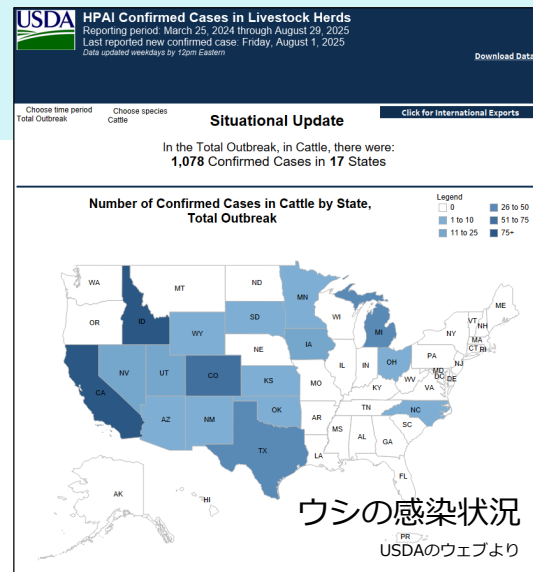
# 飼育下哺乳類の感染状況

## アメリカ

- 2024年3月に初めて乳牛で感染が確認された後、17州に拡大、2025年8月1日以降は確認がない。合計1,078件（うち771件はカリフォルニア州）が報告された。
- 発生家きん農場で飼育されていたブタ（10月2頭）の感染が報告された。
- 対象期間中にイエネコの感染が95頭報告され、その一部は発生家きん農場または酪農農場のネコであった。
- 動物園等の飼育施設でネコ科野生動物の集団感染、死亡が複数箇所が発生した。
- 酪農場、家きん農場の作業員等において、ウシもしくは家きん由来と考えられるウイルスのヒト感染が2024年3月から2025年2月の間に13州で70例確認され、うち1名が死亡した。

## その他の国

- インドの家畜市場で1月にイエネコ99件（うち18頭死亡）の感染が報告された。
- 英国でヒツジの感染が確認された。
- カンボジアでH5N1亜型ウイルスのヒトへの感染が増加、2025年1月以降、15例が確認された。



# 集計及び情報処理の方法

## • 集計対象

- 2025年8月29日までに報告された高病原性鳥インフルエンザウイルス（HPAIV）感染確認事例のうち、2024年9月1日以降、2025年7月31日までに発生したものを対象とした。
- WOAH（国際獣疫事務局）への報告を基本としたが、それ以外の情報も追加した。情報源は別途示した。
- 同一箇所、同日の発生でも、種毎に1件と数えた。
- 野生鳥類の集計では、飼養鳥、外来種（以下、飼養鳥等）、糞便等の環境試料を除外して集計した。
- 集計対象は、野生鳥類：6,268件、飼養鳥等：129件、環境試料：34件、哺乳類：1,404件であった。環境試料はいずれもアジアの国の報告で、アジアの発生状況解析においてのみ含めて集計した。飼養鳥等の約半分はアメリカのもので、飼養状況等の詳細情報がないため本報告には含めなかった。

## • 情報の処理

- アジア地域の香港と台湾（中国）、ヨーロッパ地域のグリーンランドとフェロー諸島（デンマーク）、亜南極のフォークランド諸島（英国）、クロゼ諸島及びケルゲレン諸島（フランス）、マリオン島（南ア）、トリスタンダクーニャ（英国）は国レベルの地域として集計した。南極、亜南極は中南米に含めた。極東ロシアはアジアに含めた。
- WOAHへの報告に発生日の報告がない事例（追加報告事例等）は、報告日等から推測した発生月を集計に用いた。
- 亜南極のEmpres-iへの報告で亜型HPAIはH5亜型として集計した。

# 情報源

## • 鳥類

- WOAHへの報告 [WAHIS](#)
- アメリカ農務省動植物検疫局（USDA APHIS）の2025年8月26日付け公表資料  
[HPAI Detections in Wild Birds](#)
- カナダ環境気候変動省等の公表資料 [National Avian Influenza - Wild Positives](#)
- 日本：2025年7月16日付け環境省公表資料
- 和名、分類、分布は日本鳥類目録改訂第8版の他、[eBird - Discover a new world of birding...](#)、[IOC World Bird List – Version 14.2 \(ver15.1\)](#)を参考にした。

## • 哺乳類

- WOAHへの報告 [WAHIS](#)
- Empress-i+ (FAO) [Empres-Plus](#)
- アメリカUSDA APHISの2025年8月5日付け公表資料  
[HPAI Detections in Mammals](#)  
[HPAI Confirmed Cases in Livestock | Animal and Plant Health Inspection Service](#)
- カナダ：鳥類と同じ
- 英国：英国動植物衛生庁（APHA）の公表資料（WOAHへ報告なし）  
[Confirmed findings of influenza of avian origin in non-avian wildlife - GOV.UK](#)
- WHO [Avian influenza](#)
- CDC [H5 Bird Flu: Current Situation | Bird Flu | CDC](#)
- ProMED報告事例（WOAHに報告のないもの）[Protecting Global Health, One Alert at a Time | ProMED](#)
- 和名、分類は世界哺乳類標準和名リスト（2021）に準拠した。